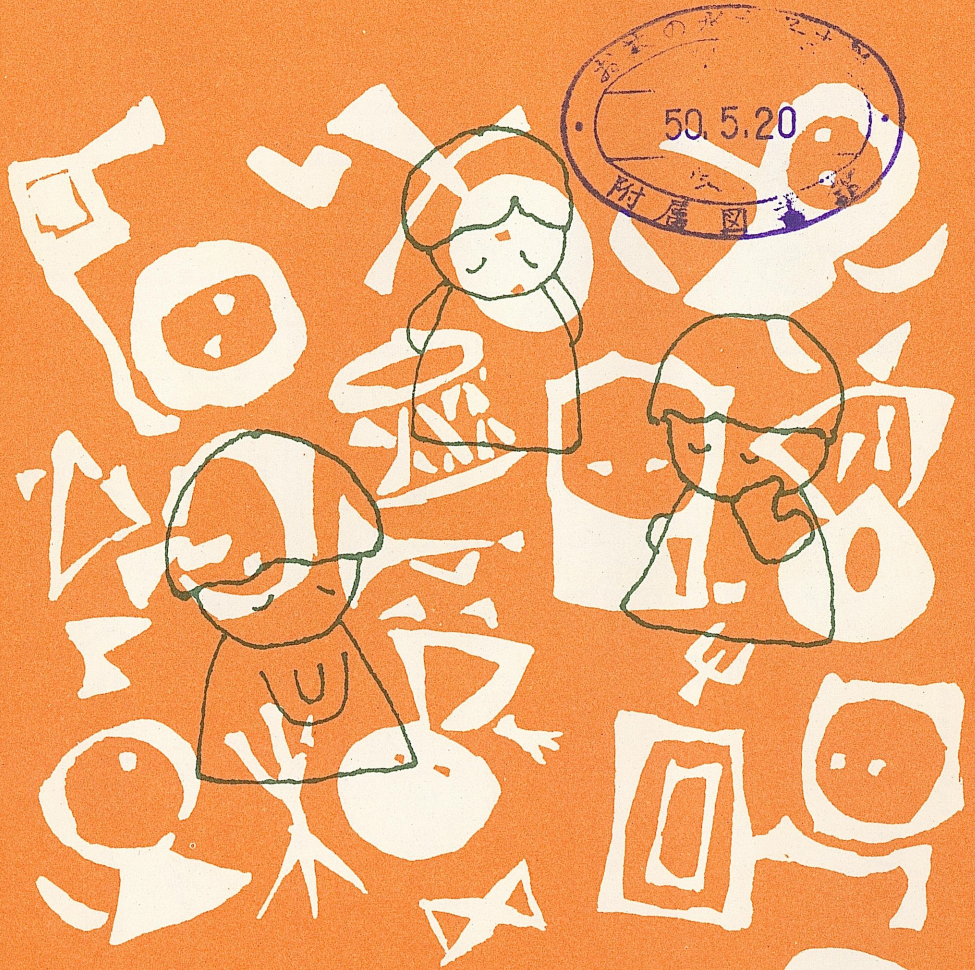


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育



第七十四卷 第六号 日本幼稚園協会

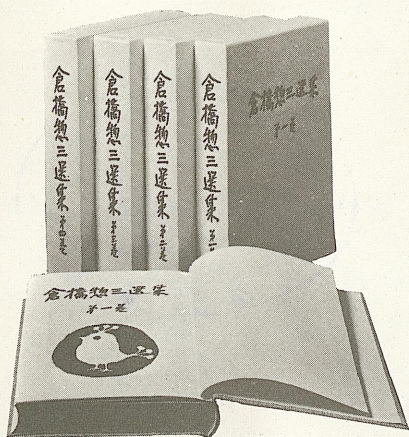
6

保育界の先駆者倉橋惣三

倉橋惣三選集〈全4巻〉

くり返し読んでいただきたい本です

わが国幼児教育の基礎的な理論を集大成し、熱心な指導と啓蒙によって、幼児教育界に多大な貢献をなした倉橋惣三先生の没後10年を記念して刊行された選集。名著として古くから愛読されてきた「幼稚園真諦」理想と反省を述べる自伝「子供讃歌」自らを園丁と任じた「幼稚園雑草」珠玉の随想「育ての心」「保育案」等々を収め、幼児教育を志す人々の必読書。
東山魁夷装丁。美装製本。



- 第1巻 幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル
.....B 6判 410頁 2,000円 千140円
- 第2巻 幼稚園雑草
.....B 6判 444頁 2,000円 千140円
- 第3巻 育ての心・就学前の教育
.....B 6判 454頁 2,000円 千140円
- 第4巻 保育案他
.....B 6判 454頁 2,000円 千140円

★保育者とお母さんに贈る――

フレーベル新書

B6変形判

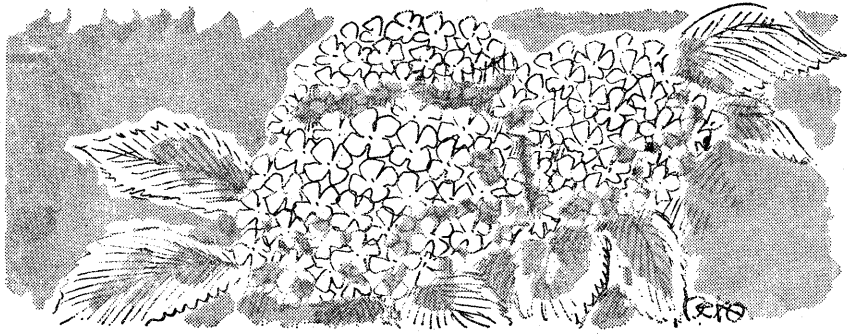
- 1 リナはどうやって文字を覚えたか
F・W・フレーベル著 荘司雅子訳 152頁 380円
- 2 保育者への一つの指針
平井信義・乾・孝・金沢嘉市・城戸幡太郎・八杉龍一 共著 180頁 470円
- 3 対談 しごとと生きがい
〈聞き手〉多湖 輝 192頁 470円
- 4 楽しい遊び 〈室内・園庭編〉
日本児童遊戯研究所編 有木昭久・湯浅清四郎共著 144頁 500円
- 5 楽しい遊び 〈伝承遊戯編〉
日本児童遊戯研究所編 有木昭久・湯浅清四郎共著 114頁 480円
- 6 楽しい遊び 〈園外編〉
日本児童遊戯研究所編 有木昭久・湯浅清四郎共著 144頁 500円
- 7 自然物のおもちや
滝田要吉著 152頁 380円
- 8 私の幼児教育論
三木安正著 176頁 420円
- 9 母親面談
昌子武司著 228頁 550円

(以下続刊)

幼児の教育

第七十四卷 第六号





幼児の教育 目次

第七十四卷 六月号

表紙 三好碩也
カッター 中島英子

☆対談

徳川宗敬(4)
周郷博

「すばらしい子供たち」を撮影して

田沼武能(18)

私の幼児教育論 VIII

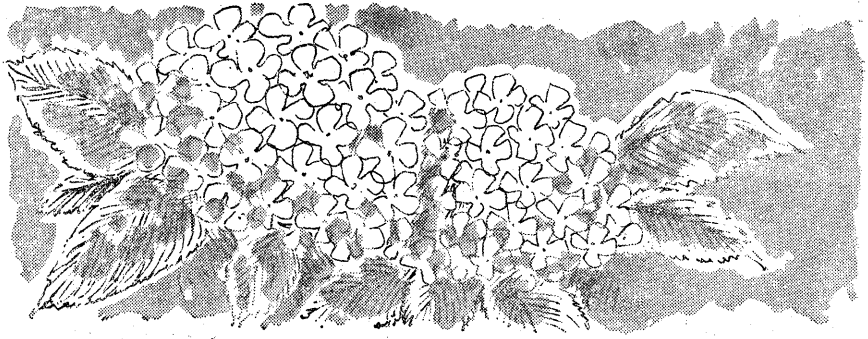
神沢良輔(21)

沖繩だより

牧野静子(25)

外へ、外へ―倉橋惣三選集より―

清水光子(30)
榊田正子



私の保育……

阿部 房子……(34)

幼児にとつての「自分」……

南 館 忠 智……(39)

☆始まり……

山 本 秀 子……(46)

始まり……

早 川 満 寿 子……(48)

はじめてのこと……

大 橋 利 恵 子……(49)

旅・発達 (四)……

津 守 真……(50)

「こどもとリズム」を読んで……

山 村 き よ……(59)

子ども側からのカリキュラム……

福 井 達 雨……(60)

対談

幼児の教育—それは樹木を 育てるようなもの

徳川 宗 敬

周 郷 博

生と同じ水戸の方で、徳川先生のご父君がイタリー公使でいらした明治二十年ごろ、一緒にイタリーへお連れになり、女史はあちらでいろいろ研究されて、帰国後水戸で幼稚園を始められたのだそうです。そのころ徳川先生はよくその豊田女史のひざの上で遊ばれたとか……。

二月にしては暖かいよく晴れた日の午後、もみじ幼稚園園長の徳川宗敬先生と周郷博先生をかこんで、もみじ幼稚園と学習院幼稚園の先生方十七名でなごやかな集りがありました。実は、徳川先生は

まれたことがおありで、「徳川さんという方に会ってみたかった」とこのことで、当日司会役の学習院の高木先生流にえば、「おじいさま(失礼同志のお見合い)のような形で始まりました。

以前から一度周郷先生とお会いになりたいとのご希望をおもちだったとか、一方周郷先生の方も、徳川先生の奥さまが終戦後、水戸のいなかで農業生活にお入りになったということを週刊誌か何かで読

まず最初に徳川先生の方から、「幼児教育とのかかわり」ということで、「しいていえば」と日本の幼稚園の創始者ともしられる豊田英雄女史とのかかわりをお話しになりました。豊田女史は徳川先

学校の敷地が少々広くて、そこに幼稚園をたてては、ということと自然と園長におなりになったのだそうです。そしてまた八年前に、「これはまた大間違い」とご自身はおっしゃいますが、伊勢神宮の大宮司になられ、今は伊勢と東京の間を始終、行ったり来たりのご生活と、うかがいました。

「林業」ということで、「ぼくは今、ますます、木とか、そういう性質のものに

人間以上の親しさを感じている”と周郷先生は体をのり出さんばかりで、土いじりの話、木を育てる話、つきつきと話題はつきまませんでした。

☆ 土いじり

徳川 私はこんな経歴なものですからいつも父兄の人にも話すのですが、やはり幼稚園の教育は木を育てるのと同じだと思ふのです。同じ木を育てるのでも、幼稚園の教育は、根を育てることだと思つているわけです。ですから文字なんかも教えません。というのは、根を作るための教育ですから、あまり早く葉っぱを作つては困る、そんな素人考えでやっておりますので、専門的なことは先生からうかがいたいと思います。

周郷 ぼくは、“先生”っていったらいいのか、“徳川さん”ていったらいいのか(笑い)……会つて話をしたといわ

れた時に、直感みたいなもので、“木を育てる”……ぼくもそれに似たようなことを考えてるんじゃないかというふうにお感じになっておられるんじゃないかと思ひました。それで実は楽しみにして、今日うかがいました。そして、ぼくの思ひ出の中にある一つのことをききたいなあと思つていました。戦後十年ぐらいたつたでしょうか、週刊誌か何かに、徳川さんの奥さんが水戸のいなかの方で農業をやっているという……あれは何に出たんでしょう、やはり週刊誌ですか？

徳川 はい、週刊誌に何度か出ました。
周郷 そしてぼくはその時から、いつかその人に会つてみたいなあ、と思つていて、いつのまにか忘れていたんですけれどいよいよ十五年以上すぎて……(笑い)

人間にはよくそういうこと、あります

ね。“あの人に会つてみたいな”と思うんですけど、忘れていて、ある時偶然その機会がくるという……

徳川 あの当時百姓をやりましたね、大抵ほかの人はやめてしまいましたが私のところは幸いに息子夫婦があとをついでおります。彼は学生時代に体をこわしまして、私どもが農業をやっているところへきている内に、とうとう本百姓になつてしまいました。ぜんそく持ちで、健康の上からも大学へ行くよりはということとで、今もって、牛を十何頭かもちまして酪農をやっております。あの当時やっていた人は皆やめてしまったのですが、今まだやっているのはよっぽど馬鹿か……

周郷 “よっぽど馬鹿”というのはいい言葉ですね。(笑い)そうじゃなくちゃいけませんね。戦後引揚げてきた人や何かが一時的に、農業へいったわけで

す。しかし世の中がちょっと変われば、農業なんて手段にすぎない、つまりふんだりけつたりです。

徳川 ま、家内はやり通したわけです。

周郷 ぼくは……一方では都会に対して劣等感をもっていましたけれど、何となく大地とか川とか林とかいうものが好きでした。今は渋沢にいますが、やっぱり川はきれいであってほしいし、他人の山でも掃除したくなるしね。一昨年停年になってから、畠を借りていろいろ作ったり、人の畠の麦ふみなんかもしています。

土いじりをやっている、さっきいわれた、根が大切だというのがまずわかりますね。農業や何かで地力が弱くなっていると思いますので、山へ行つて、五月ごろには草刈りもしなきゃなりませんし、便所もくまなきゃなりません。そし

て、いよいよ芽が出てきますね、だんだんのびてきて、若者になってきたというような感じ、この時の色と姿、これが変になつちゃうとぼくの神経までガクッときますし、よくなつてきた時は、非常にうれいんです。ちよつと、説明つかないんですけれど……そういうふうになりました。ぼくはずい分おそく始めましたけれど。

徳川 停年におなりになつてからですか？

周郷 ええ。百姓してるといろいろなことを考えますね。ですから、今度本を読むとよくわかるんです。本を読んだだけで何がわかるわけじゃないんです。

体で、こうじゃないか、と考えていると、本を読んだ時に、パッとわかつてくるんです。言葉や文字の世界と違つて、木とか水とか作物とか山羊とかを相手にした世界、となると普通にいう「責任」と

違つてくるわけです。社会的責任とは違つて、やらなきゃならないことをやりますね。しかし自分に責任を問うているのは人ではなくて「自分」、あるいは相手の「作物」なんです。こういうふうに考えていくと、考えの強力性というか、脳が空転しないうすむ。本を読んでも、その表面だけじゃなく、その根にあたるところまでわかる。ぼくはこの年になつて、今までの大学の生活では得られなかつたことがやれるようになったと思ひます。

☆ 山の捨て子

徳川 じゃあ、山もおもちですか？

周郷 山は、ひとの山です。(笑い)
このごろは山もたきぎも取りませんし、柿の畠なんかも植えつ放しではつたらかしてしょう？ この春はずい分剪定きんていしたり、下草を刈つたり……でも今年は一ひと

つ柿をたくさんならせようと思つて……

……。ひとの家の柿ですけれどね。(笑い)

徳川 実際、自分でそういうことをやるのは、楽しいですよ。

周郷 からだも、もちろん健康です。

時々木から落ちそうになったりしますけれど。(笑い)

徳川 よくわかります、私も開墾地へ入りますと、大きな杉の木があります、そこへ筑波おろしが吹いて、杉の種がち

ょうどだ円形に落ちます。ところがそこは竹やぶでして、うっちゃっておくとそ

の杉の稚木は枯れてしまいます。私は百姓の方は役に立たないんですけれど、こ

のやぶ掃除をしました。あんまり一生懸命やってはちの巢をかいて、はちがペー

ッときて、さされたりしました。

周郷 ぼくもやぶの中からいろいろ集めてきて植えます。植木やの木なんていうのは、植木や用にできて不自然で

す。

徳川 今の都会の子どもみたいですね。な。

周郷 そういうような木とか、川に捨てられている木とか、そういうような木の捨て子たちを集めてきて育てていま

す。

徳川 そういふのは気持ちいいでしょう？

周郷 それから、ちゃんと植え直すとまたいいものです。くるみの木を二本山

からかついできて植えましたが、玄關のところ

に植えた方は、初めきずだらけでだめかと思つたんです、しかし植えかえ

たせいでしょうか、今は、とっても勢がいいんです。若い郵便配達の人が、くる

みの茂っているところをくぐってくるのが大いに気に入っているらしくて(笑い)……それは彼のいっ

「くるみが、よくなりましたねー」

そのひとこと……彼が好きだつていうことがよくわかります。

徳川 さきほどの杉の稚木ですね、「かり出し」といいますが、この「かり出し」をしますとだんだんのびます。それが今もう見上げるようになりました。

本数にしたらわずか五十本ぐらいですが……。

開墾してしまつたのが昭和二十二、三年ごろですから大体二十五、六年たつた

わけです。やはり自分が育てた、ということでもかいいです。

周郷 本場に、山にはいろいろ生えています。やっ

と枯れないで大きくなつてやぶの中、ちよつと見ちゃわからないよ

うなところで山桜が咲いていたんです。こういうのも持って帰つて植えました。

まるで捨て子の収容所です。(笑い)

徳川 幼稚園の教育もそんなものじゃ

ないですか。能力がないように見える子どもでも、その子のもっているものをひき出してやらなければいけないと思います。

☆ 仮説

周郷 鼻をしていろいろなものがわかるっていうのは、終点にあたる知識がわかるのじゃなくて、こういうものじゃないかな、という仮説ですね。だから、死んだ知識じゃないわけです。多分こうじゃないかなという仮説がいろいろわかってくるんです。本読んだりなんかしていても、ぼくの中に仮説ができてるもんだから、読んでわかる、という喜びが深いわけです。別に植物のことを読むわけじゃなくて、人間のことを読んでいても……です。多岐にわたるいろいろなものを読んで、深くよくわかるんです。

徳川 先生方も、子どもを扱っていらして、仮説っていうか、そういうものが何かあるでしょうね。

周郷 やっぱりぼくはね……仮説っていうのは客観的じゃないですよ。しかし、各人が仮説みたいな、仮説にあたるようなものをもっていないと、知識はわからないんじゃないかと思います。それは、その人がつかんだものです。世界観といつてもいいと思うけれども。

それを全然抜きで、お勉強してもしょうがない、と思うんですがね。

徳川 しかしまあ、幼稚園の先生は、それをやってるんじゃないですか？

周郷 非常にすぐれた科学者（今ぼくが一生懸命なのはコンラッド・ローレンツなんです）、あらゆる科学者は自分で仮説みたいなものをつかんでいると思います。仮説をなせつかんだかという、ニュートンみたいに、偶然というの

もあるかもしれない。また、宗教的なものもあるかもしれない。つまり、宗教的なものなしには生きられませんからね。

それは仮説を作らせる一つの根拠になっているかもしれません。

そういうように、仮説がなければ、出発点としての科学はおこり得ないのじゃないか、あれこれみんな調べて知識をよせてみたって科学にはなりません。調査じゃないんです。仮説がなきゃ、調査は意味がないです。

そういう意味で、ぼくは農業をやったよかったです。農（業）をやっているっていうのはちょっと適当じゃないんです、ぼくは「農」をやっているっていうんです。（笑い）

徳川 私がいなかでやっているのは、酪農じゃなくて「酪」ですな。（笑い）

実際は、損をしているんです。

周郷 植物のほかに、動物を飼うと、

やっぱり人間は植物と動物と一緒に過
してきたんですから、これがないと、人
間が人間になるのにも、どこか欠けち
うわけですね。

徳川 動物のお話が出ましたが、私の
幼稚園は、よくお前のところは動物園だ
などといわれるくらい、たくさんいろい
ろなものを飼ってます、やっぱり子ども
も、あれらを見ますと、何か得るもの
があるだろうと思いますね。

周郷 情緒障害とか、自閉症なんてい
うのはね。動物と話してると、ちゃんと
話せるようになるんじゃないかと思いま
す。動物は素直ですからね。やはり話と
いうのは、そういうのと話していくから
自然に話せるので、初めから先生なんて
いうのと話すんじゃないね。(笑い)段階を追
つていかなきゃ、無理ですよ。

☆ 二十五年先の目標

周郷 前の杉の木のことなんですけれ
ど、東山魁夷さんはぼくの昔からの友人
なんです、東山さんは家を建てた時
に、門から玄関まで、北側に、杉をすー
っと植えたんです。二十年ぐらいたって
杉が大きくなった時のことを考えながら
魁夷さんは植えたんだと思いますね。大
きな杉の間を通過して玄関に行くなんて、
いいでしょう？

二十年、幼児教育もそういうことを考
えた方がいいんじゃないかな。これも仮
説なんだけれど、二十年先を考えてやる
方が楽しんじゃないですか？ 大体教育
っていうのは二十五年ぐらいい先を考えな
きゃいけないものでしょうね。

徳川 今の子どもが大きくなるころに
は、日本がどうなるか知りませんが、資
源がない国ですからどんな苦勞をするか

わかりません。それをしよって立つの
が、ちょうど今扱ってる子どもなんで
す。

周郷 今生まれた子が二十五歳、紀元
二〇〇〇年になった時のことを、いろい
ろなことを、仮説として考えることはで
きるわけです。エネルギーなんかでも、
ウランとか水素核の融合とかね、そんな
夢のようなことは考えていられないと思
います。人口は多くなって自然法則的に
競争しますからね。そういうことは仮説
としてわかりますね。少なくとも、トイ
ンビーが日本についていってするように、
日本人は、よき労働者になるということ
を、世界の中で考えるべきじゃないか、
軍事力とか何かでおどかすんじゃないか
……。

ところがこの線は、教育の中において
ほとんどゼロですね。よき労働者になる
ような教育はどこにもありません。〃勞

働者をさげすんでいってはいけません。

本当にいい、体も心もよく使つて、自分の目の利益じゃなく、世界の役に立つ努力を惜しまないということはなくなつてしまいました。二十五年先を考えたら、そういうふうに育てなかつたら、あまり労働するのがいやで、一攫千金みたいなことをやってたらだめです。

徳川 そういう時代が来そうですからね。

周郷 よき労働者になる、そしてよき労働者であるということは、ちゃんと自分でよく使える肉体をもつということですよ。同じように脳というものも、肉体が動けばよく働くようになると思います。肉体ぬきで頭が働くことはいけません。心身両方にわたつて、よき労働者になる、よき労働をして、本当によく考える(利己的でなく)と、心もすがすがしくなります。それが現実のわれわれの世

界では、全部抜けおちています。

徳川 今の教育の目標は、サラリーマンになって、高い月給をとるようになるということが、大体的目的じゃないでしょうか。

周郷 そうなんです。それがめあてで、それが幼児まで「さがつてきてる」んです。

よき労働者になる、その前に、土遊びとか、動物の世話、作物を育てるといふのも子どもには(そのままでは無理だけれど)遊びとして大事です。子どもの遊びっていうのは、大人の遊び以上に労働ですね。大人は、どんなに労働者でも、たとえ職人であってもやつてる労働は一つの目的をもっています。子どもの遊びっていうのは、そういうわくもありません。そして、一生懸命遊んでおれば、大人の労働よりもっと完全な労働者です。そういう遊びを子どもの時

にやっておかなければいけません。

でも、子どもが遊ばなくなつたんですよ。遊ぶ場所もないんです。

ヨーロッパの人たちは、「職人」という意味での「労働」に対する熱心さをもっています。日本は非常に急速にサラリーマンになってしまいました。

徳川 伊勢のご遷宮が二十年ごとにありますね。これは一般の方はおやしるだけ建てると思つていらつしゃいますが、おやしるはもちろん、神さまの調度品も全部新しくするわけです。刀もありますしいろいろあります。しかし、それをやる職人がだんだんなくなつてきたんです。まだ今度はできましたが、このつぎになつたらなくなるんじゃないでしょうか。ということは、今お話し「よき労働者」がなくなつたということです。同じ織り物一つするのでも、商売を離れた、技術を習得するそういう人がなくな

ってきたんですね。

周郷 商売をぬぎにした、その職人の仕事をすること自体がむくいだという、それがお札なのだということですね。

徳川 ま、そういうことを今の子どもにうえつけるといふのは……

周郷 これほど変わってしまったと、どこでどうしていいかわからないんです。

徳川 日本人は、ともかく能力のある国民ですからね、そう悲観はしていませんが、どこかで、切りかえる必要のあるところまでいったら、切りかえるのじゃないかと思っっていますけれど……。

周郷 仕事をすることがむくいであるということ、政治家にもあっていいんじゃないかと思っます。結果がどうだとか、得票がどうかじゃなくて、この政治をやるということがむくいである、これは学校の教師でも同じだと思っます。これは手段で、いつもほかのことを考え

ている、なんていうのはよくないです。

徳川 でも、幼稚園の先生はいろいろ苦勞も多いですが、それでもって生きがいを感じているんじゃないでしょうかね。

周郷 農業、じゃない農(笑)いはね、それ自体むくいられるんです。そして疲れを忘れて働いちゃうんです。あまり手をかけすぎてもいけないんだけど、日が暮れても働いちゃうんです、母親なんというのも、子どもが小さいうちは大体そんなものでしたね。疲れなんか感じないでやってきたわけです。疲れを意識しすぎるんだな、このごろは。

人間としては、高級な仕事ですよ、農をやることも、生まれた子どもを育てることも、普通の子、とももですけれど、障害をもった子どもにかかわっていると、いやおうなしに学ぶことになりますよ。何かそういうふうに、農をやるとか、山か

らとってきた実生の杉を育てる喜びなんというのは、人間として基本的なものじゃないかと思っますね。

このあと、徳川先生の幼稚園の先生方が昨年伊勢へ行かれて植林をなさったのお話から、この松は二百年たつとご用材になるという非常に雄大な楽しみに話されました。またその植林にあたって、根はまるまっただまではないけない、ひろげて、それをふんで、いじめるほどに固めなければいけない。それは子育ての親の心と同じだといわれたと、先生方からご発言がありました。そのあと、かわかないように枯葉で根元をおおっておくこともすべて幼児教育に通じるものだとこのことで、お二人は大いに相づちをうっていらっしました。

周郷 今、二百年という話が出ましたけれど、今は時間というものが非常に早くなりますね。昔の人は、二百年先を見こして植林をしたと思います。孫子の代にということ……。しかし、二百年というのは考えようがないかもしれない、また、二百年後、自分が死んでからあとはどうでもいいっていうことはないと思います。それは、実体としてあるわけです。たとえば、地球が変なふうになるにしても、やはり二百年あとというものを、自分一個の人間の中に含んで生きていくべきです。“あさつてご馳走を食べよう”ということしか考えない人より上等な人だと思います。(笑い)

逆に、人間は子どもころのことを意外に覚えているものだということから、今でもよく幼稚園の卒業生が訪ねてきたり、集りをするとの徳川先生の

お話があり、今ふうの長い髪に赤いズボンの男の子などが来てびっくりされたとか。

☆ 記憶——生きている経験

周郷 今、徳川さんは“忘れない”といわれましたね。やはり六歳くらいまでのことは、普通は思い出せないと思えます。世間普通の、知っているという意味で思い出せるのはそのあとなんです。これはうすいでしょ？ その前は、忘れちゃったようなんですけど、しかしその方が本当の思い出せることなんです。知識じゃないんです。あとで“覚えた”っていうのは、大脳皮質のところへ記憶したということですよ。それ以前の方が本当の記憶です。

徳川 身につけている……。

周郷 そうです。その人の人格と不可分な記憶です。その人の、見る目と、感

じる心と一緒になるものですから、記憶だけとして分離できないものです。そこが重要だと思います。

デュボスが“生きている経験”といっているのは、“知らないで、いつの間にかわかった”ことじゃないかな。子どもが、先生やお母さんに笑いかけられてホッとする。こういうのは、その子もっている遺伝子の何かと、外からの経験がぶつかったものです。それが“生きている経験”でそれ以外にその場かぎりの経験は、ずいぶんあるわけです。自分で、“これだな”と思う。この経験で“自分”になる、そういう経験だと思えます。やっぱり、一人の人間の一生を支配するのは、この“生きている経験”じゃないでしょうかね。

徳川 それは尊いものですね。

向島のお生れで、幼稚園は両国の園

技館の近くの江東幼稚園。よく遊ばれた国技館のそばのいちょうが忘れられないとおっしゃいました。もみじ幼稚園には大きなメタセコイアがそびえているようで、周郷先生も、木というのは本当に忘れられないものだと話され、メタセコイアのさし木をおもらいになるお話にまで発展し、あと五年ぐらいは死ぬわけにいかないな”には一同大笑いたしました。

このあと周郷先生は奈良でいちょうの絵を画いておられる画家不染(鉄)先生のお話をされ、その方は自分の小さいころの記憶の中のいちょうを画かれるので、見なくても画ける、そして非常にいい画だということでした。東山魁夷さんの画の中にも、幼児のころの思い出を画かれたものがたくさんある。それだからただ表面的なものを画いたのではなくて、幼児の時から求め

ていたものがこめられているので、あれだけ見る人の心をつつ力があるのだ、と話されました。

☆ 今の幼児教育―男性の役割

周郷 こういうことを考えると、今の日本の幼児の教育つていうのは、今のよいうな状態でいいのかどうか……何か、もっと大事なことがあるんじゃないか、という気がするんです。

音楽とか何とか、一種の天才教育、あれはあれで、大勢の中からはいい子もできます、でも犠牲者も多い、ということと考えるべきです。しかし考え方をかえると、どの子にもいい教育、なんてものはないもので、どんなやり方でもやはり犠牲者はあるんです。どの子もみんな幸せになります、なんていうのはうそですね。

どのくらい幸せになるか、という条件

としては、社会全体のふん囲気が大事なんだと思います。社会全体が、じっとして怠けてはおれない、皆が本当に創造的に生きましょ、そういうふん囲気になつてくれれば犠牲者も少なくなります。自分のエゴなんか考えてるひまがなくなる。そういうふん囲気が大切です。

徳川 残念ながら、そういうふん囲気がなかなかないですね。しかし、幼稚園と家庭というのがうまく結ばれれば、多少よくなるんじゃないでしょうか。

周郷 そうです。やはり家庭を引きこむことが必要です。そしてもうひとつ、女と男との違いがあるんです。男性がもうちょっと(ということとは男性保育者がほしいということではなしに)力を出してほしいと思います。男性は、先ほど徳川さんもふれられたように、男性の価値というの、女より先を見ている、というところにあるんです。だから、女から見

るとまだるっこく見えるんでしょね。

(笑い)あの人は夢のようなこと考えて……

しかし、それが男性なんです。そのことで男と女は助け合っているんです。

徳川 私は自分の娘や息子が幼稚園にお世話になっておりましたころは、一度もうかがったことがないんです。しかし最近父の会などというのがある、けっこうお父さんが出ていらっしやいます。傾向としては悪くないと思えますが……

周郷 そうですね。でも意地悪く考えると、ぼくはそういうところへ出てくるお父さんで、女みたいなお父さんだと思うの。(笑い)もうちょっと男らしい男が出てきてほしいんです。

昔は今と違って、お父さんというのはおソソリティーがあったんですよ。そういうところへ出たんではみっともないということ、出たくても我慢してたんで

す。

☆ 大人は大人らしく

これは方々の幼稚園でやっていらっしやることでしようが、もみじ幼稚園でも餅つきをなさって、その時はお父さん方の参加が非常に好評である、ということから、大人が大人のあるべき姿を子どもに見せるということは必要であるし、これが教育なのだと言郷先生はいわれました。大人は、子どもの方ばかり向いて、やるべきことをやらないのはよくない、ということ、そばにいて、ちょっと助言すればいい。その場合、子どもを意識しなくていいのだとお二人そろっておっしゃいました。もみじ幼稚園には日本一小さなお母さんの図書室があって、徳川先生のお考えとしては、まず、お母さんが一、生懸命本を読んでいる姿を、子どもに

見せることで効果があるのだということでした。

アメリカでもそういう反省がおこってきたと周郷先生は話されました。今までは子どものきげんをとりすぎてきた、あまりきげんをとりすぎると大人になってやる気がないのでないか、といつて、きょう迫もいけない、そういう意見が多くなってきたそうです。

周郷 大人だから、勇気やばげましを与えることは必要です。しかしきげんをとる必要はありません。

徳川 たしかに、親たちの間にもそういう傾向がありますね。

周郷 ぼくも園長をして、いろいろな経験をしましたが、大人が大人であることが、子どもにとって幸せなのだ、と思います。子どもたちがさわいだからといって「誰が静かにするかな」なんて間接

的なことをいってもだめなんです。(笑い)

大人は大人らしい顔つきをすればいいんです。おどかすというんじゃないんです。そこが難しいんです。おどかす、というのも大人の低級さを現わします。大人が権威をもつていうことは、子どもも求めていることじゃないかなとぼくは思います。

それから、周郷先生が園長時代に園児に、電車の中で「席がない」とぐずる子どもの話をなさって「そういう子どもはここの幼稚園の子じゃない、明日からは乗り物の中では立つように」とおっしゃった時に、本当に子どもが真剣な眼つきをしたことを話されました。そして徳川先生も、昔ベルリンにいらしたころ、あちらの子どもは、大人が乗ってくるすとすつと立って席をゆ

ずつたとおっしゃいました。

周郷 親も悪いですね。ひどい人になると、三歳ぐらいの子どもを靴のまま窓の方に向けてすわらせて、ジュースかなんか飲ませて、「あんた疲れたでしょ？」なんていってる。やつと歩けるようになったんですよ、歩くのは当り前です。今から疲れているんなら生きてるかいがありません。(笑い)「疲れたでしょ？」なんて、大人が暗示にかけてるんです。言葉っていうのは、そういう暗示力があるんですから、使う言葉っていうのは大事です。しかも、この世で一番頼りにしている母親がそういうことをいったら、疲れていなくても疲れたような気になります。(笑い)

徳川 たしかにその通りです。

夏休みの前なんか、先生方はお約束、帽子をかぶりましょうとか何とか、

いろいろいいますね。でもぼくは終始一貫、「紙くずを捨ててはいけない」それだけをいっています。

周郷 ああ、それは本当にいい文句です。捨てちゃいけませんよ。

徳川 ですから「紙くず園長」っていわれるんです。(笑い)

周郷 それをほっておくと、捨てるのが平気になって、その内へへ理屈をつけてまで捨てるようになってっちゃうんです。どうしても捨てる気が悪い、という人間がふえれば、ごみはへります。公害も緩和されます。でも、みんな捨てて、しかも、それを悪いとは思っていません。それこそ、そういうことをくり返して教えられた子どもは、二十五年たったら、貴重な人間になるでしょう。もっとも、そういう子は、初期は悩むでしょうね、ほかの人がみんな捨ててるから……。しかしその悩みをもつことも必要で

す。

徳川 悩みばかりじゃなく、誇りももつてしょうから。

☆ 子どもの持ち味

このあと、徳川先生から、幼稚園時代には手のつけられないほどのあばれん坊だったのに、小学校、中学校とへて、現在高校生になっている卒業生の話が出ました。彼は自分でも、自分が幼稚園時代そんなにあばれたということが信じられない。今、あばれたいと思わないのは、きつと幼稚園の時に思いきり遊ばせていただいたからだろうといったというお話が出ました。

周郷 今の子どもたちは、遊び場がなく、何かちんまりと生きてますね。それであとになって、変なあばれ方、暴力とか犯罪とかにつながっていくんじゃない

いですかね。そういう意味で自由空間がほしいですね。

徳川 彼は、幼稚園を出て十何年かたって、本当にありがたかったっていつてるんです。

周郷 まあそりゃ、人間の持ち味っていうのもあって、あばれん坊でない子もいますけれどね。

人間の性質、あばれん坊でもおとなしい子でも、初めは非常に粗野な形でもっているわけです。これを使えばそれがその人の人格になり、それがいい加減に、現われないまままで自然に腐らせていったりすると、だめになるんです。その子の持ち味、あばれん坊は、あばれることで自らを教育して一つの人格にプラスしていったんだと思います。

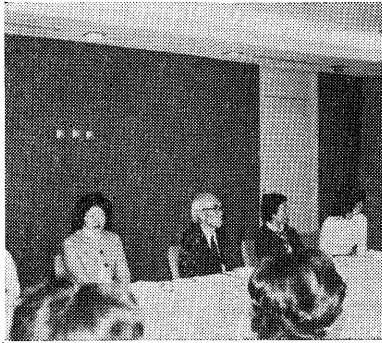
せっかくここへきて、若い人たちから発言がないのは、ちょっとさびしい気がしますね。でも保育の職場というのは、

女性にとってそれがいい経験になるような、そういう職場であってほしいと思います。俸給の手段ではなく、先生たちの生きがい（神谷美恵子さんのいったような）がもう一つの重要なことなんで、その生きがいもまた、その人一個の問題にとどまらないで、世の中の役に立つ生きがいになればいいと思います。

徳川 いろいろ苦しいこともあるでしょうけれど、毎日子どもと一緒にいると、愉快でしょ？（笑）

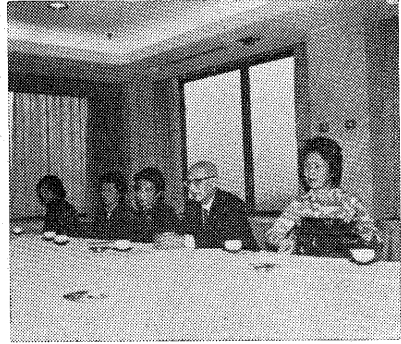
周郷 それが、その「生きた経験」愉快なものになるかどうか、人によっていろいろ違うんじゃないでしょうか。

五年、十年やってれば、だまってたつてそれだけの年月はたっていくんですから、ただ俸給のために十年いた、というよりも、人生を十年いた、という方がいんじゃないでしょうかね。大人として、年長者としての持ち味が出てくるこ



周郷先生

お話には一同大笑いでした。そして、



徳川先生

とがよいと思います。きまりきったカリキュラムじゃなくて、予測できなかったことが起こってくるようなことが、生きがいとしては大切です。

一応この辺できりがついたように見えながら、まだつぎつぎと話題はつきませんでした。殊に、このごろの子どもはマッチもすれない、もちろん火をおこすこともできないと周郷先生はなげかれ、ガスや電気などと違った本当の火の色の美しさ、それこそ、人類が人類になった時の火の色なのだと話されました。そして徳川先生も、伊勢神宮の毎日の火は、いまだに原始と同じようにしておこされるのだとおっしゃいました。ともかく日本はマッチが多すぎて、ヨーロッパでは喫茶店でもあんなにやたらにマッチをくれないとの話は一同大笑いでした。そして、

日本人は今や養鶏場のにわとりのように(昼間から電気をつけて、夜までコッソコやってい)る)なっていました。とはお二人の共通したご意見でした。この集りは霞ヶ関ビルの三十四階という高いところで行われ、お話が終わるころには夕日が空を真赤に染め、遠く富士山も見えました。"まあきれいな色だ"と、周郷先生は少々辛らつなことをおっしゃいました。でもやはりこの汚染された都心において、気が付かなくなってしまうに、今さらのように気付いたのも、この先生の一言のおかげでした。いつまでもいつまでも、お名残り惜しい気持ちでこの集りをとじました。

(一九七五・二・一三)

赤間 記

“すばらしい子供たち”を撮影して

かつてアメリカの大統領選でルーズベルトに破れたウエンデルウィルキー氏が、選挙後世界を旅行して“ワン ワールド”という言葉を残されたことがあります。私は子どもの世界こそ“ワン ワールド”であると思います。彼らはすぐ友だちになることができます、そして皆遊びの天才です。どんな状態にあっても遊ぶことを忘れません。働いていても、教室の中でも、ちょっとした物、ちょっとした時間を利用して遊びに発展させてしまいます。遊びに没入した子どもたちの姿は真摯な一途すがあります。

私に世界の子どもたちを撮影しようと思いたたせたのは、パリ郊外にあるブローニュの森で遊ぶ子どもたちでした。私はビクニックに来ている子どもたちをカメラで追っているうちに、いつしか彼らの世界に吸い込まれてしまったのです。それは私に忘れていた子ども心思い出させてくれたに違いありません。

田 沼 武 能

——この大人にない無限な可能性、美しい生命を持つ子どもたちを画にしよう——

あれから十年いろいろな国の子どもに会うことができました。中国の上海で母親に散髪してもらっていた少女、エクアドルの山奥で会った少女、ソ連のサーカス学校の生徒、リオのカーニバルで踊っていた子どもたち、一人一人の顔が楽しい思い出が甦よみがえってきます。中でも強烈な印象を受けたのがペルーの奥地マチュピチュに行く汽車に乗った時のことでした。

途中の駅に列車が着くと、子どもたちが群がってきて、小さな手をさしだすのです。乗客の誰かが、小銭せちを投げると、その小さな手の波は、どっと崩れて、われ先に小銭せちを拾おうとするのです。

私は大人であることの恥ずかしさと、いたたまれぬ怒りに

かられました。

もう三十年も前になります。青年であった私は、焼けくずれた東京の街を歩いていました。進駐軍のG Iが、いたる所にいました。

そして、G Iの姿をみると、

「ギブミー、ギブミー」

と手を出す幼い同胞がいました、もし、封の切られていないガムなどをもらえば、それはすぐ、ヤミ市の商品となっていたのです。私はその終戦当時のことを思い出し、複雑な気持ちになりました。

子どもにとって豊かな遊びとはなんでしょう。

オモチャがたくさんあることでも、人形がたくさんあることでもないのです。豊かな自然の中で遊ぶことだと思いません。フィジイで会った子どもたちは木のぼりをして遊んでいました。彼らは木のぼりに飽きると、下に流れる川に飛び込み、今度は水泳をして遊んでいました。ロンドンにもパリーにも広い公園があり、自然の中で遊べるようになっていきます。私はある日、ロンドンの街なかで遊ぶ子どもを撮影しようと思ひ出かけました、一日中歩いて二組の子どもしか会う

ことができませんでした。

近ごろの日本には「大人こども」ばかりで、わんぱく坊主がいなくなったといわれます。オーストラリアで、ある商社マンを訪ねたとき、わたしと同年輩のその父親は、

「坊主が、こちらへ来てから、子どもらしくなった。この広大な自然と、受験戦争から解放されて、彼の性格形成にいい影響を与えているのかもしれない。しかし、あまり長いこと、こちらにいると、今度は日本へ帰ったとき、それだけ立ちおかれてしまうのではないかと思うと、全くわからなくなる」

といていたのを思い出します。

私は南ベトナムには一日半しかいることができませんでした、その短かい時間にサイゴン郊外で五つの交通事故を見ました。そして十指に余る葬儀のトラックに会いました。彼らは、それほど驚いたようすも見せません。南ベトナムでは戦争が始まって三十五年になります。生まれた時から大砲の音を聞き、やがて戦場になり出され、運の悪い者は戦死してしまふ。戦争とともに生活をしており、死に対して慢性になっ

てしまったのです。恐ろしいことです。そして私の訪れた孤児院には、たくさんの両親を失った本当に不幸な子どもたちが収容されていました。この不幸な状態を誰が止めるのでしょうか。大人の勇気ある決断しれないと思います。この地球から戦争をなくし、美しい地球にして、この子どもたちにバトンタッチすることが私たち大人の責任ではないでしょうか、この十年間「すばらしい子どもたち」の撮影をして痛切に感じました。

(写真家)

☆ 著者紹介

たぬま・たけよし氏は一九二九年東京生まれ。東京写真工業専門学校卒業後、木村伊兵衛氏に師事、サンニュース・フォト社に入社、報道写真家として活躍。一九六五年からタイムライフ社と契約、世界各地取材した。

著書「武蔵野」など。(写真集「すばらしい子供たち」朝日新聞社発行 二、九〇〇円 より)

今年の一月、この「すばらしい子供たち」写真展があることを、私は新聞やテレビで知りました。そしてぜひ実物を見たいとこの会場に行きました。予想通りすばらしい写真ばかりで、私は何度も会場を歩きつ戻りつしました。色の美しさはもちろん、写真の中の子どもたちが実に生き生きと、ほんとうの子どもなのです。こんな子どもの姿をとらえることのできる方はきっと、子どもの心のわかる、子どもの好きな方に違いない、と私は思いました。たまたま幸運にもその日は、田沼氏ご本人が会場にいらして、写真集を買った人にはサインをしてくださるといいます。私は、この日の記念に一冊を買い、サインをしていただくべく列に並びました。待っている間に私はただサインだけでなく、何か書いていただきたいな、と考えました。そして私の番がきた時、

「子どもであったことを忘れないために」と書いてください
い」

といいました。その方はちょっと私の顔を見てから、筆をとって特色のある字で、すみ黒々と書いてくださいました。

その日、帰ってから写真集のあとがきを読んですますお願ひしたくなって、手紙を書きました。快くひきうけてくださって届いたのがこの一文です。

赤間 記

私の幼児教育論 VIII

保育の基本 (六)

神 沢 良 輔



三 保育の基本 (六)

——幼児とのかかわり合いの中で——

(VIII) 幼児を集めさせるときは、保育者が先にその場所へ行く

(1)

私にとって初めての幼稚園の現場であった、四日市幼稚園に
たときの経験であるが、この幼稚園では、入園式の日、親子の
記念写真を撮影することになっていた。それは、入園式の日
は、親が晴れ着姿で必ず付き添ってくるということから、親を含
めた全員の写真がとれるということのためであつたらしい。もし
後日すると、わざわざ入園記念写真のために、親があらためて
来園するということになり、親の出席率も悪く、出席しなかつた
親の幼児がかわいそうだというこのためでもあつたらしい。確

かに入園式の日には記念写真を撮影するにはそれなりの理由があ
る。しかし、実際に入園記念写真の撮影となると、当時の五歳一
年保育児、五学級の親子の写真をとり終えるのには、最低一時間
はかかってしまうのである。だから、幼児たちは、わずかの式の
時間と、記念写真の撮影と、それを待つために、入園式にくと
いうことになってしまうのである。

すくなくとも入園式の日には、幼児は幼児なりにこれからの園
の生活についての期待と同時に、反面では緊張や不安をもって参
加しているだろう。だから、なにはさておき、このような幼児た
ちのもっている不安を解消してやるために、あすから始まる幼児
の園での生活についてのあらましを、からだで体験させてやる必
要がある。

でも、入園式に写真をとるためには、保育者は、ひとりひとり
の幼児に接したり、幼児と遊んだりして、幼児の気持ちを安定さ

せるといふことよりは、撮影のための順番を待っている幼児たちが、他の学級の中に入っていないか、また、待っている場所から離れてはいかないか、全員がそろっているだろうか、などというこのために気をつかってしまう結果になりかねないのである。

しかも、そこにいる幼児たちは、保育者としては初めて出会った幼児たちであり、入園のための準備などで名前については全員知ってはいても、それらが顔とは必ずしも一致してない幼児たちであり、また、ひとりひとりの幼児のもっている性格や行動特性については不明の幼児たちなのである。だから、保育者は、幼児のつけているクラス別の色のついた名札をたよりに、自分のクラスの子の幼児たちの動きを追うことだけに神経をすりへらすことになる。

また、幼児たちの方も、保育者については入園式での園長の紹介ではじめて知った大人であり、その大人と自分との関係について、当然ながらきわめて不安定であるということがいえよう。

そこでは、どうしても幼児とのかかわり合いをもつということの基本からはなれ、いかにして、幼児たちを管理していくかというところが中心になってくるのである。

(2)

このようなことから、保育者と話し合い、入園式の日には、記念写真の撮影は中止することにした。

そして、入園式のあとは、保育者は、まず幼児と遊ぶことになり、幼児との人間関係に入ることにした。しかし、そこに父兄が入りこんでは意味がないので、その間は、筆者が園長をさせられているという因縁から、親を集めて、約一時間、「幼児教育とは何か」ということで一席ぶつことになった。

幼児と保育者が去った式場は、主役のいない劇の幕あいのようなものではあるが、各保育室や運動場からは、保育者と遊ぶ元気なよい幼児の声が聞こえてくる。この声に安定感をもちながら親に話をするというのが、それからの毎年の筆者の仕事にされてしまった。

さて、このように入園式当日から保育をしたことは、第二日目からの幼児の安定感に大きな影響をもったようである。つまり、保育者と遊んだということで、朝の出会いでも、保育者に親近感をもつて接してくれるし、そこでの安定感は、靴を下駄箱に入れることでも、通園服を所定の所にかかけたり、作業衣を着る場合にも自分から進んでしようとする意欲がみられたりするし、また、元気のよい幼児たちは、保育者の準備した環境の中へ、スムーズ

にとびこんでいって楽しく遊んでいるし、全体に落ち着きがみられるように思われた。

(3)

入園式の日このような行事の変更のため、記念写真の撮影は、四月下旬の親子での遠足の日になされることになった。この日は、それ以外に、いちばん始めに、親の方は、PTA総会をもかねることにし、それに参加してもらうことにした。そして、それが終りしたい学級ごとの記念写真を撮影するということであるが、この時期になると、学級としてのまとまりもすこしずつできてくるので、入園式にするのに比して時間もあまりかからずにできるようになってきているし、他の学級の撮影している時間も、保育者と一緒ならば待つことも可能である。

撮影が終了すると、徒歩で十分ぐらいの電車の駅まで歩き、そこからまた十分ぐらいの電車に乗り、さらに、そこから二十分ぐらい歩いて、さつきの美しい目的の小さな丘への遠足が始まる。

そこに着くと、自由行動となるため、親子つれだって三三五五適当な場所へと散っていく。保育者はそのあとで、親の参加しなかった幼児たちを集めると、同様に春の丘を散歩し、昼食をするということになる。

さて、昼食も終わり、ひと遊びしたので、帰途につくため集合の合図の笛が吹かれた。

五人の保育者のうち、三人は、予定の時刻より前に、集合する地点に帰ってきていた。集合の合図で、幼児や父兄たちは、あちこちから集合場所へと集まってきた。そして、集まってきた幼児たちを順番に並べ始めた。残りの二人の保育者はどうしているかなと思って見回すと、はるか遠方から、二、三人の幼児たちと手をつないで、スキップしながら楽しそうに、こちらへやってくる。まことに美しい心温まる風景である。

早く集まってきたその学級の幼児たちの中には、保育者を迎えるに行くものもいるし、「先生早くきて」と呼んでいるものもいる。

やがて、保育者も全員集まり、幼児たちの人員確認ということになった。早く保育者のきていた学級の幼児たちは、このときすでに保育者の顔を見て、安心して並んで待っている。だが、保育者のおくれた学級の幼児たちは、保育者のまわりに集まってなかなか並ぼうとしない。でもしばらくして、保育者の努力で、どうやら並ぶことができた。だが、保育者にとっては、他の学級に比べて、あまりにも手間どったり、並んだといっても並び方が雑然としているのが、気になったようで、ついに、

「私の組、なんで、こんなに、おうちやくな子ばかり集まった

んだらう” “早くしなさい” ということばがでてしまった。

(4)

このことは、よほど二人の保育者の心に残ったとみえて、園に帰るなり、保育者間の会話の中でもなされた。

この二人の保育者は、一人は、その年の人事異動で他園から転職してきた、経験年数数年の保育者であり、もう一人は、本年度の新採用の保育者であった。

この二人の保育者は、ともに朗らかで、幼児ともよく遊び人間関係もうまくいっていて、園内で幼児との生活においては、これまで、他の保育者の信頼を得ていたのである。

そこで、保育者の間で幼児の集合についての反省が以下のようになされた。

幼児を集合させる場合は、幼児は保育者をめあてに集まってくるのだから、保育者は、集合の場所にいち早く行って、そこで幼児を待つてあげることがたいせつである。集まってきた幼児たちは、そこにいる保育者と目が合い、またすこし話し合つて受容されることと安定して、並んで他の幼児のくるのを待つようになるのである。

もし、保育者の集合場所へくるのがおそいと、早くきた幼児た

ちは、保育者に自分のきたことを認めてもらいたいという感情が満足されずに不安定になり、ある幼児は、その場所から離れ、保育者を迎えにいったり、また、他の幼児は、不満足のまま、その場でいわゆるいたずらをして、気分をまぎらすような行動にでたりすることが多いし、そのようなとき保育者があらわれると、このような情緒の安定のために、保育者とのかわり合いの時間が必要となる。けれども、保育者は、おくれたということで、早く並ばせねばならぬということになれば、幼児は満足しないうまま、保育者の指示に従うということになり、うまく並べないという結果になってしまうのである。

このようなことは、当然わかっていることではあるが、いざ実際の場面になると、なかなかできないということであろう。遠足などの場合は、きわめて典型的にあらわれるが、園内の平素の保育においても、同様の場面はきわめて多いのではないだろうか。

このような場面を見落さないようにして、

“幼児を集合させるときは、保育者が先にその場に行って” 幼児を安定させてやりたいものである。

なお、この例に出した保育者は、その後、このような失敗をすることはなかったことを最後に付言しておきたい。

(暁短期大学)

沖繩だより

牧野 静子

一、沖繩の風土記より — 石垣島（石垣市）移民の島 —

二百年前の明和八年（一七七二）に襲った大津波のために、石垣島は全滅に近い打撃を受けた。このとき全琉にわたって約一時間の地震があったが、地震がやむと、海上から雷鳴にも似た轟音が響きわたった。つづいて、大干潮が発生し、その後間もなく、三回にわたって黒雲のような大津波が怒濤の如く押し寄せた。被害——約三万人の島民のうち、三分の一が溺死、全潰部落八カ所、半潰部落七カ所。流出家屋二千余り、浸水家屋一千余りと記録されている。石垣島における明和大津波の恐ろしさを如実に物語っている。

かつて、石垣島はマラリアの島でもあった。苦悩に満ちた移民と開墾も、マラリアのために、部落全体が滅亡していった。いままなお各所に見られる廃村の跡が、その凄絶さをなまなましくとどめている。ところどころに点在する生活用具が、雨にうたれて風

化しており、朽ち果てた柱が、さびしげに住居跡を示している。耕された原野も、再びもとの姿に戻っている。言い知れぬ悲しみ、うたれる情景である。むかし、この地に人々が働き、もだえ苦しむ、嘆き悲しんだのである。僅かばかり残されている石垣のすき間から、当時の人々の叫びがもれてくるようである。

石垣島は移民の島である。犯罪者として、あるいは強制移民として、部落をつくり、耕地を開墾してきた。現在でも、裏石垣方面では部落単位の生活をしている。歴史を共有することは、社会を構成するための必須な条件であるが、ここでは歴史、制度、経済、行事、宗教、文化などいずれも僅かずつれている。

開拓の苦しみに加えて、津波やマラリアによる大被害が石垣島民の性格をどのように揺り動かしたかは、想像に難くない。ひたすらに教育に力を注ぎ、子々孫々を島から脱出させることに希望を抱いたとしても、当然のこととして受けとめられる。それがゆえに石垣島では、筆一本が財産だといわれ、異常なまでに教育に

熱心である。雄大な自然と豊穡な亜熱帯植物群、それに素朴で特異な民俗芸能に魅せられて、今では年ごとに観光客が増加している。悲惨な過去がまるで幻のように消えてしまった。米原のノヤシ群落、荒川のカンヒザクラ自生地、平久保のヤヤマシタン、宮良川のヒルギ林などが国の文化財に指定された。

なかでも川平貝塚一帯の景観は素晴らしいの一語に尽きる。川平湾は、リーフが自然の防波堤となつて、波が静かに行んでいる。

強烈な太陽の光で川底の砂が緑に輝き、エメラルドのじゅうたんを敷きつめたように、靈驗なふん囲気をもたらしている。タヒチ島を中心とするポリネシア諸島にボラボラという島があり、ここでは水上にあつても空中に浮かんでいるようで、あたかも天に登つていような気持ちに誘われるが、川平湾の美しさは、ボラボラの海に優るとも劣らない。また川平湾は、黒真珠の産地として有名である。黒真珠の母貝はクロチョウ貝といつて、世界的にはかなり広く分布しているが、黒真珠ができる条件として、川平湾はその北限にあたっている。黒真珠は、クロチョウ貝が口を開いたときに、夜露が落ちてつくられたといわれ、このような伝説が川平湾をより一層聖域化している。川平湾をはじめ、豊かな観光資源に恵まれた石垣島には、将来の飛躍的發展が約束されている。沖縄本島から四五〇キロも離れており、相当の地理的ハンデ

ィキャップを背負っているにもかかわらず、まれにみる速さで進展を続けている。八重山経済のパロメーターともいえる石垣港の取扱貨物は、優に二十万トンを超え、二千トン級の船舶の接岸能力も可能になった。市街も近代的な住宅や店舗が建ち並び、都市化の構想が着々と進行している。好むと好まざるとにかかわらず、脱古琉球をはかっている。

近代化が微妙に古琉球を圧迫し、新興都市としての歯車が回りはじめた。移民の島としての部落単位の社会組織がいま崩壊しようとしている。石垣市には三十九部落があり、それらはそれぞれに違った個性をもっている。一つの行政単位としては、あまりにも広い地域とあまりにも異質な文化を同時に抱えているが、近代化の波は容赦なく押し寄せ、石垣島を一つの器に包もうとしている。数々の話題を提供した宮良と白保の対立、孤立した裏石垣の文化、それらはいま古い土壌の下に埋蔵されている。いま石垣島は新しいイメージの島に生まれかわろうとして未来に向かって大きくはばたいている。

二、石垣市の幼児教育

就学前の幼児を幼稚園に入園させ、適当なる環境を与えてその心身の発達を助長するように保育することは、「三つ児の魂百ま

で」という言葉の通り教育の基礎段階として最も重要なことである。しかし、今より三十年前のこと、その当時はややもすると、

幼児の教育は大方家庭まかせとなり軽視されがちであった。しかし終戦後民主的文化社会への一大転換により、人権は尊重せられ、幼児教育の目標や内容制度の一大変革につれ、幼児教育の施設はますます重要視され、各部落もしくは学区等において幼稚園が設置された。本園の設立以前は、幼児保育機関として石垣市内にただ一つ、やえやま幼稚園があるのみで、一般民の認識も薄く、幼稚園は単に生活にゆとりのある家庭に属するものであるような感を抱く者が多く、したがって幼稚園設立当時は、区域民にこの事業の理解と協力を高めることは容易なことではなく、この経営はいたって困難なことであった。

しかし初代園長初め職員有志各位とともにあらゆる困難を克服し、多大な犠牲を払って今日に至った。現在では石垣市では市立幼稚園十三園と私立幼稚園五園が設立された。当園の創立は大平洋戦争終結後の昭和二十一年一月二十五日であって、戦災による住生活の苦悩、食糧飢饉、マラリヤの爆発的大流行、医薬品その他の生活物資の欠乏等の結果、人心が極度にすさみ、世道全く混とんとした世相下に設立し、当時の入園児僅か三十名、それが毎年増加して現在では二千九百余名を数える発展をとげた。

三、郷土のわらべうたと民謡

まずうたって楽しいものは詩の内容がすぐれたもの、そして沖繩の音楽を総合的見地からとらえられるものを結びつけた沖繩のわらべうたは非常にうつくしく、誰が口ずさんでも親しめるものである。この五年間ぐらいわらべうたを実践家を通して勉強し、カリキュラムにとりいれ、子どもたちと一緒に楽しくうたっている。色彩ゆたかで豊富な内容をもった沖繩のわらべうたは、限りない美しいうたではあるが、現代社会の大人たちは、あまりにも生活がせわしなく機械的で、子どもを眺める余裕すらないのが実状のようである。

私たちはわらべうたの指導を通して、祖先の子どもに対する愛情、子どもたちの言葉の美しさややさしさ、音楽動作の楽しさをはだで感じとることができる。指導しているうちに、ひとりひとりの子ども表情、顔、気持ちをよく見つけてはたらきかけたことは、人間の信頼、思考をも高めていくのに大切なことだと思ふ。これまで実践してみても、わらべうたで子どもたちがどう変わったかという点、教師と子どもの一対一のつながりができたこと。子どもの中からもしぐさ遊びが出てくるようになったこと。一斉保育の中で目だたない子が生き生きとしてきたこと。グルー

プ遊びからはみだしがちな子どもが、仲間入りをし、あきがなく
 続けてやっていることができるようになった、などである。お遊
 戯発表会にも、わらべうたなどを発表し、リズム楽器遊びにも民
 謡をとり入れると、子どもたちはとても興味関心をもって喜んで
 楽しもうたう。参観者のお年寄りの方には、なつかしいうただと
 感激し好評である。これからも、もっと実践を大切にして、わら
 べうたの研究を深めていきたいと思う。指導の立場として、でき
 るだけ勉強をし、きちっとした姿勢で子どもたちに伝えることが
 大切ではなからうか。これまで子どもたちに親しまれたうたの中
 から、ごくわずか、八重山の石垣島のわらべうたを紹介いたしま
 す。

◎雨

(1) アーメーマーヤ フイタポーンナ

ティダーマーヤ アガリタポリー

(解) 雨こんこよ 降りやんで

お天あまとさまよ 上あとくれ

(2) アーメーマーヨ フイタポリー

ティダーマーヤ アガリタポーンナ

(解) 雨こんこよ 降ふってくれ

おてんとさまよ 照りやんで

◎数え歌(お手玉のうた)

イッチク タッチク ジュニガ シーカー ハーリン トーマ
 ハーリガ ユイサー

(解) 一二三四五六七八九十

註 明治九年石垣島にマニラ人六十四人漂流し、海岸に仮居し
 て久しく滞在していたことがあって、子どもたちと仲よ
 くなって教えたものだという。私たちの幼いころは、よくこ
 のうたをうたいながら、サザエのふたでお手玉遊びをし
 た。

◎ じんじんばーれー(ほたる)

ウティリヨー ジンジンパーレ

アガリヨー ジンジンパーレ

(解) おりておいでよ ほたる

舞いあがれよ ほたる

「ジンジン」はほたるの幼児語である

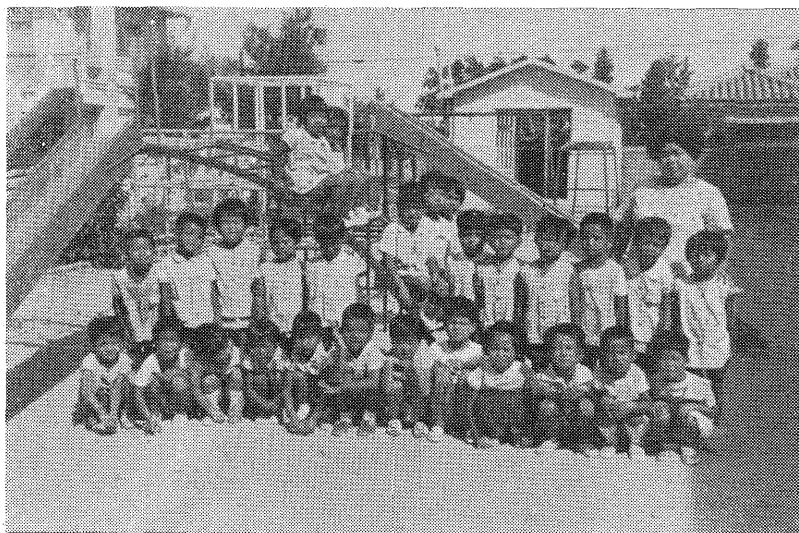
◎ 牛ぎうの足あし ぞーれ ぞーれ

ウシヌパン ゴーレ ゴーレ

ウマンヌパン ゴーレ ゴーレ

アキレバ キャン キャン

モーシンガニ チルンガニ ゴッフエ



著者と、みやとり幼稚園の子どもたち

(解) 牛の足 馬の足 しげしげしい中を、モーンガニ(女名) チルンガニ(男名) が来てパッターり出合った。

これは子どもたちが輪になってすわり、足をなげだして数えながら遊ぶうたである。

◎ そーろんがなし(盆の祖霊)

ソーロンガナシ ヌ ウシユマイダー

シヨッコーシラリナ オッタネー

シヨッコーシ オイサバ

トゥサン ナーサンカルイヨリー

(解) お盆祭りのお先祖さま、ようこそおいでになりました。きつとお祭りいたします。遠いかなたのあの世から、きつとお寄りくださいな

(石垣市みやとり幼稚園)

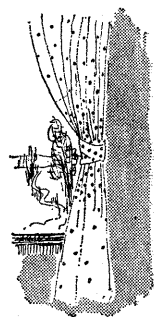


外へ、外へ

倉橋惣三選集 第二巻より

春風が誘いに来る。蝶々が迎えに来る。若草は褥しよとを敷いて、花は美しき笑みをたたえて、野も山も子供の外遊を待ち設けている。花の香草の香をとり添えた、かぐわしく新しい野の空気と、万人の浴するに任せて、与えて惜しまない豊かな日光と、皆これ子供のために備えられた、大なる自然の恩恵ではないか。何者の無情漢ぞ、この好季においてなお子供の足かせする。せめて、この好季にあたって、その狭くらしい煉瓦塀の囲いと、きゅうくつな保育室の机腰掛けから、つとめて子どもを解放せざる、何も屋根の下のみが保育の場所ではあるまい。その手を引いて丘へ上り、そのすそをかかげて小川を渡り、野を馳せめぐりて花を摘み、磯をつたうて貝を拾う間に、そこに大きな保育の場所があるのではないか。

広い自由な遊び場と、新鮮な空気と、充分な日光とを、子供の



身体の立場のみから賛美するのはまだ足りない。吾人は寧ろ子供の精神の眞の発達のために、第一欠くべからざるものとしてこの三つを要求する。わけても快活にして、清潔にして、温雅なる子供の性情の発達のために、何よりも無くてならぬものはこの三宝である。しかも都会の文明は、だんだんにこの宝を子供から奪って、都会幼児のこの点における不幸は、日一日とその度を加えてゆくのである。眞に子どもの幸福を願うものは、先ずこの不幸から、我等の小さき友を救ってやらなければならぬ。我等の幼稚園における四時不絶の急務の一つもまた、常にこの点に存する。少なくともその適切なる機会を捉うることにおいては我等は決してウツカリしてはならぬ。まして気無精、足無精であってはならぬ。(以下略)

昭和十七年二月



倉橋先生とともに 園水幼稚園のお茶

「春ですなあ……」と少しおどけた笑顔でおっしゃりながら、お茶大附属幼稚園の庭にあるばらの家のつるばらの芽のふくらみほぐれているのに見入っておられた倉橋先生のお姿が、はっきり目に浮かぶ。あれはたしか卒園児への記念写真をとるので、教員一同がそこに集まったときであった。その写真は今も私の古いアルバムに収められているが、そのとき、先生のお心の中にはさまざまなものが湧くようにみちあふれておられたのではなかっただろうか。「春が来る、子供らのために春が来る、幼稚園のために春がくる」と、熱っぽく、とさえ思われる文章につづいて「外へ外へ」が書かれている。

原っぱを走り、汗ばんだ顔の輝く目、庭のすみにみつけた小さな白い花をそっと渡してくれる掌てのひらのぬくもり、そのような胸を熱くしている私ではあるが、感じ方の何と浅はかで厚みのないことだろうとわれながら悲しくなってしまう。「外へ、外へ」にはもっとももっと深く行き届いた子どもへの愛情といおうか祈りといおうか、思いがこめられているように思う。この文章が書かれた数十年前、すでに都会の文明が「広い自由な遊び場と、新鮮な空気と、充分な日光という三つの宝」を子どもたちから奪って

清水 光子

ることをなげいておられる。「何も屋根の下のみが保育の場所ではあるまいに、この三つの宝を子どもに回復することが「幼稚園の四時不絶の急務の一つ」であるし、そうすることが私たち今の大人が子どもたちへせめてものおわびのしるしではないかと思う。かけがえのない私たちの子どもたちへの、かけがえのない三つの宝を何としても取戻すために、「氣不精足不精であってはならない」のだ。

幼稚園教育要領の自然領域のねらい云々など堅苦しいことはいうまい。「子どもに充分に四季を知らめしよ、四季を楽しませよ」との警告をしつかり胸にきざんで「愛する子どもを真に心配なく外へ連れ出す機」をのがさないようにしよう。「保育予定案の如き、少しくらいいいかにしてもよい」という言葉に甘えておろかな保育をしたい。「子どもの自己活動のもっとも正当な資料として自然は一番」であり「理屈もなく自然は教え、教えずして活動せしむる自然」である。しかも自然はいつも和やかに暖かいばかりでなく厳しく冷たい時もある。子どもにもそれを感じとらせることが大切ではないだろうか。

私たち自身「もっとまじめに、もっと謙遜に、自然の表面の美を享受するばかりでなく」まず自然と一致することではないだろうか。そして衿を正して、自然の恵みを、三つの宝を子どもたちに

一杯にうけさせるように努力したいものである。

「シート。だまって！ 何かないてるよ！」

田んぼの、まだれんげ草がそこに咲いているかわいた所におべしとうを広げているとき、かえるの声をききつけたAちゃん。

「ねえ、聞こえるでしょう？」

砂浜でみつけた巻貝の殻を私の耳にあてるBくん。

斜面の草原、茶色っぽく枯れかけている草原を歓声をあげてころげ降り、顔をうつむけたまま「ああ、いいにおい！」というC子。

葉をすっかりおとしたいちじょうの木の、更に上を見上げて何も言わずにいる子どもたち三人。

倉橋先生がよくおひきになる「自然と一つになるは児童の榮譽なり。児童と一つになるは教師の榮譽なり」とのスタンレー・ホルの言葉を繰返し心に銘じよう。

それにしても、倉橋先生が言われていることを、私は少しでもわかっているのだろうか、先生はもっともっと深いお考えであつたのだろうか、ああ……。

(音羽幼稚園)

榎田 正子

「ママ、春にならないと桃の花咲かないんでしょ？」

「そうねえ」

少し早いかなと思いつつ出したおひな様に目を輝やかせて見入っていた息子が、突然口を開いてこう言った。おひな様に無くてはならない桃の花がまだいけてないそのさみしさを、敏感な子どもの心が一瞬に感じとったのかもしれない。ここにも春を待つものがあつた。われわれ大人はその幾年もの経験から、ありとあらゆるものが息ぶぎを始めるわくわくするような生命力や、れんげの花のピンク色にトッピーとつかってしまいたいようなあのかぐわしいあたたかさを頭に描いて春を待つが、三歳や五歳の子どももやはりそれなりに一日も早い春の訪れを待っているのだ。

春になったら——倉橋先生も書いておられるように、つとめて子どもたちを戸外に連れ出そう。自然の中で遊ばせよう。子どもたちはきつと私の手をふりほどいてかけ出して行くにちがいない。そして五歳の息子は彼なりに、三歳の娘は彼女なりに、それぞれを持つたくましいそれでいてこまやかな心で、自然とまじわり、発見し、春を感じとることであろう。そんな子どもたちを見

ながら、私もまた私なりに身も心も伸ばして、胸いっぱい深呼吸し、春の新しさを満喫したいと思っている。青い空の下、緑の草の上では特に、「ほらもんしろちょうよ、見てごらん」「この花のにおいをかいでごらん、いいにおいよ」といった姿よりも、ともにも大いなる自然の腕にいだかれた仲間として、それぞれのからだ、それぞれの心で、ちょうを追ひ、花を見つめていた方がふさわしいような気がするからだ。

そしてそんな仲間同志の心がふとひとつのものに向いた時、（この瞬間に私は大いに期待をよせているのだが）そこには思いもかけない深くうれしい心のふれあい——真の共感とでもいうのだろうかが生まれるように思われるのである。（もちろんこの共感、私にだけついて言えば、家の中では母親然、主婦然とした態度がじゃまをしてしまうのであろうか、どうも戸外にいる時の方がより多く体験できるのが現実である）母と子のこんな心のふれ合いを、この冬の間にも私は幾度か体験することができた。冬枯れで心によびかけるものなど何もなかに見える寒空の下でもこうであったから、すべてのものに活気がみなぎり美しくなる来たるべき春の季節には、どんなにか豊かな母と子の心のふれあいを体験できるのでないだろうか。春を待ちこがれる私の気持ちの中には、そんな気持ちも日増しにふくらんで行くのである。

私の保育



阿部 房子

はじめに

私が幼稚園の教師をしていたのは、四年間でしたが、その間に、純真な子どもたちに接し、感動的なすばらしい思いを数々経験しました。しかし今回は、ごく毎日行われてきた保育から、私なりに得た教訓のようなものを綴ってみたいと思います。

まず、私が幼児教育を志して大学に在学していたころ、教育実習の日が近づくと、かわいい子どもたちに、「あー、今日はおもしろかった」と思うようにして降園させるには、何をして遊ばせたらいいかしらと頭を悩ましたものでした。あのころの私は、子どもが活動するにはまず先生が遊びを教えなければいけないものと思っていたからです。学校を卒業して本当の先生になったならば、なお一層、子どもたちが、いつも新鮮な気持ちで遊びに取り組めるよう、新しい遊びを用意するのは、むずかしいだろうと心配したものでした。ところが、どうでしょう。実際に教師として、子どもたちをあずかってみると、教師が意図的に遊びを提案する前に、ほとんどの子どもが、思い思いの遊びを始めるではありませんか。

しかも紙一枚、あき箱一つなど、一見おもちゃになどなりそうにもないような物まで、子どもの手にかかると、立派なおもちゃに変身してしまいます、こうした子どもの自発的な遊びは最も子ども自身を満足させ、時によると、降園の時間が近づいてもなかなか止められないくらい楽しそうに行われました。これで、私が教育実習をしていたころに考えていた不安は消え、かえって子どもの生き生きと遊ぶ姿を見ているうちに、次のようなことに気がつきました。

つまり、教師の方から子どもの遊びを決めたり、与えたりして、いかにも遊ばせるというふうにするのではなく、子どもは興味を持つと、それに没頭して遊ぶのだから、教師は子どもの興味に合わせ、子どもの自発活動を主として指導していくことが大切であるということでした。こうして私の保育の態度が、子どもの活動の中から少しずつ教えられ、新米先生なりに毎日の保育を行うようになりました。

子どもに教えられたこと

先にも述べたように、大部分の子どもは、登園するとすぐ遊びを展開していくのですが、時には「何をして遊ぼうかな」と迷っている子が見られます。教師がいくら前も

って遊具を使いやすいように並べておいても、何となく子どものその時の気分にはそわないのでしょうか。このような時「これで遊びましょう」とか、「あそこにいるお友だちに、混ぜてもらいましょう」などと指図するよりも、ちょっとの間、そっとして上げるのもいいようでした。

Aちゃんは、何をして遊んだらよいかわからないと、よくピアノの下とか、部屋のすみじつと身動きもせず隠れていることが好きで、そこで心を整理すると自分で考えた遊びに向かって元気に活動するのでした。そこで、保育室の一部に、そっと一人でいられるようなコーナーを作っておいて、誰でもちょっと心を落ち着かせることができるようにしました。子どもは、普段賑やかな状態が好きなのですが、時として一人になりたがる時もあるのです。そのような時の扱い方も工夫してみました。

ところで、教師と子どものふれ合いは、毎日一緒に生活しているうちに、目に見えないような細かい糸から、しだいに太い糸のような物で結ばれていくように思います。お互いに信頼する度合が強くなっていきますと、それが子どもの自発的な活動をより一層豊かにしていくのでしょうか。入園当初は教師もひとりひとりの子どもの気持ちをくみ取る

『ウルトラテレビ』

私の勤めた幼稚園では、子どもの家庭でのようすと幼稚園でのようすを伝え合うために、『お便り』というカードを利用していました。私は、その『お便り』も保育に役立てようと思い、「先生の家には、この組のお友だちの教と同じ数のチャンネルがある『ウルトラテレビ』があるのよ」という話をしました。これは、お家の方が書いて下さった『お便り』で知ったことを、子どもの前では、「先生の家にある『ウルトラテレビ』で見たのよ」ということにしたのです。

「Dちゃんはお家に帰っていい子でいるかしら」と思ったら、『ウルトラテレビ』の三チャンネルを回すのよ。そうするとCちゃんが夜寝る前に、ちゃんと歯をみがいているところが映ったり、この間は、四チャンネルを回したらDちゃんが映ってきて、Dちゃんは幼稚園から帰ったらすぐうがいをして手を洗ったのよ。偉いわね。それから幼稚園で作ったあき箱の汽車で遊んでいたら弟さんがほしがるので、弟さんにも同じ汽車を作って上げたの。ずいぶん、いいお兄ちゃんね」と皆の前で話してやります。

すると、Dちゃんはもちろんのこと皆、興味深く私の話を聞くのです。今まで話の聞き方が不得意だった子まで、不思議な『ウルトラテレビ』のお話というとしつと聞き入るようになってきました。また、どの子どもも、自分のことを皆の前で話してもらおうとうれしいらしく、自分から教師に向かって話しかけることの少なかった子まで、

「先生、私、きのうママのお手伝いしたんだけど、『ウルトラテレビ』で見てくれた？」

などと話すようになったのです。こうして不思議な『ウルトラテレビ』のお話は、子どもにとって大切な生活習慣を身につけさせるため、それを実行させる手段として、時用いてみました。また、この方法は、お家の方からも喜ばれ、『お便り』に以前よりも詳しく子どものようすを書いてよこしてくださるようになりました。そして、その『お便り』によって、幼稚園での子どものようすに変化などがあつた時は、その意味を探るのに大変参考になりました。この『ウルトラテレビのお話』は、私が退職しても続いており、今だに「先生、遠くに住んでいても、私のこと、テレビで見てね」などという便りが来ます。お家の方もよく子どものようすを書いて寄こして下さるので、幼

幼稚園時代のことが、はっきりと目に浮かんでくるのです。子どもはどんどん成長し、いつかは『ウルトラテレビ』の正体はトリックであるということを知る時がくるでしょう。しかし自然にわかるまで、子どもの空想を羽ばたかせておいてやりたいと思います。

〃私の保育〃をかえりみて

私の保育は、空間的な観点から言うと、どうしても、自分の勤め先である幼稚園のみを保育の場と限定しがちであることを反省し、園外保育を通して、自然に接する機会を作りました。また、勤め先で得た実感的教訓のみに満足してしまうことの偏狭さを恐れ、講習会に参加したり、書物を読んだりして保育の充実化、向上化に努めるようにしたこともありました。ところが自分にいざ子どもができてみますと、子どもを幼稚園であずかるには単に、その幼稚園の時期の子どものようすを知るだけでなく、生まれた時からの子身の発達状態を知ること、保育の上で重要なことだということが知らされます。なお、一人一人の子が、親兄弟、その他、まわりの方々によって、手塩にかけてここまで育てられてきたということ、自分の子どもを持つこ

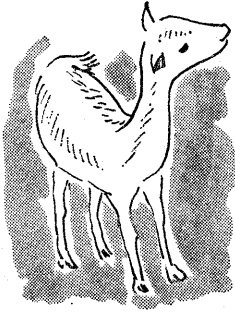
とによって、なお一層強く感じ、幼稚園の先生は若い、「お姉さん先生」ばかりでなく、自分の子を育てた経験のある「ママさん先生」の存在も非常に大切ではないかと思いました。

私には、一歳になる子どもがいますが、その子のようすを見てみますと、私が家事をやっている相手になってやらないと、つまらなくなってしまう。大人にとって困るようなことをしています。このようなようすを見ていると、子どもを持つに至った今の私には、幼稚園児が、いたずらをした時など、注意をする前に「どうしてそのようなことをしたのかしら」と、考えて上げる、心のゆとりができてくるような気がし、もし、再び幼稚園に勤めるようなことがあったら、独身の時とは、また、異なった保育のあり方が見られるのではないかと思っている今日このごろです。以上、幼稚園教師をしていたころに得た、私の教訓的なものと、自分自身の子どもを持ってから知り得た保育の教訓のようなものについて、とりとめもないことを綴ってみました。

幼児にとつての

「自分」

南 館 忠 智



1 「サンサイタモン」

珍しく日中、家で書齋に閉じこもったとたん、外で遊んでいた娘たちが友だちと一緒にドヤドヤとかけこんできました。ひところ友だちと遊ぶのが苦痛のふうだった娘たちも、どうやらその時期を乗り越えたようでもた朝から夕方まで、大きい子と小さい子と、泣かされたりけんかをしたり世話を焼いたり、「忙しい生活」を楽しんでいるようです。きょうは一―二歳年上の子たちと五人グループ、それぞれお気に入りの楽器をもち出して「ガッソウ」が始まりました。そのにぎやかさといったらモウ大変なものです。いづれ一時間もすればこの豆台風、またカシ（河岸）を変えること間違いないうのですが……。それにしても豆台風という表現、その語感といい後に残る余韻といい、なかなかピッタリと感じ。いいですね。

ところでこの二人の娘たち、先日、母親と一緒にかかりつけの医院へ出かけたのだそうです。夕食の際、自分たちから進んで報告するところによると、

「ジブンデネ、チャントコシカケテネ、トントンシテモラッタンダヨ」

母親に抱っこしてもらわずに椅子に腰かけて、打診やら聴診やらしてもらった、という次第です。それが得意でしかたがないようですが、ことばの端々に、動作に、表情に、ありあり。

これには伏線があつたのです。彼女らは、つい半月ほど前、「サンサイ」になつたことがうれしくてうれしくて、大得意。「オカアサン、シマチャン ナンサイナッタ キイテノ」と一人がせがむと、もう一人も負けじと「オトウサン、ナンサイナッタ エリチャンニモ キイテノ」と催促。また、「ユビガ シロクナッタヨ」とやつて来て、指をしゃぶるからだネと言われ、「モウ ユビ シャブラナイヨ、サンサイダモンノ」。それに加えて、「ネルトキ タオル イラナイヨ」とオシャブリ放棄宣言まで上げ、親の方がびっくり。その後、これらの宣言がほほキチンと実施に移されているのに、親は二度びっくり。

そしてきょうは母親の手を借りずに診察してもらつた、というわけです。もらつて来た薬も自分で飲んでいきます。聞いてみると、真顔で「オイシクナイ」との答え。彼女らの言う「ガンマン」（我慢）を励行しているらしく、一年ほど前までガンとして口を開かず、医者公認（？）の薬ぎりだったの

がまるでウソのよう。

などと書くとは、まるでイイ子みたいに錯覚なさるかもしれませんが。いずれにせよ、これに類する経験はさして珍しいものではありません。子どもが得意でしかたがない気持ちではありますまい。子どもが得意でしかたがない気持ちを、それこそ全身で表現するのに一度も出くわしたことがない親が、また保育者がいたとしたら、それこそ不幸というべきでしょう。この日の出来事のうち、筆者の最大の関心をひきつけたのは、ちよつと別のところにあります。

2 「オカアサンハ モウノ」

娘たちの話を引きとつて、母親はこんなことをつけ加えたのです。聴診や打診は本人たちの言うとおり。口を大きくあけて、との指示にも素直にアーンをしたのだけど、ベッドの上におおむけにされ、おなかを触られる段になると、心おだやかならず。くすぐりたいやら、少々気はすかしいやら……。そして飛び出したことばが、

「オカアサンハ モウノ」

ああむきという無防備に近い状態にしておいて、おなかをコチョコチョするとは、フェア・プリーの精神に反する。だいたい、おなかを丸出しにするなど、赤ちゃんに対してならい

ぞ知らず、「オネエチャン」に対して失礼千万。それにしてもこの姿勢では、抵抗するにも思うにまかせない。残されたテは、もはやたった一つ。ことばによる「攻撃」あるのみ。

高速度撮影されたフィルムを見返す感じで彼女の心境を推察してみるなら、多分こんなことになるでしょう。ここでユカイなのは、彼女が「オカアサンハ モウノ」と叫んだ点でず。自分をかくもくすぐったく、気はずかしい目にあわせている「元凶」がイマナカセンセイにはかならないことを、彼女は十二分に承知していたはず。それにもかかわらず娘は、「センセイハ モウノ」とは言わなかった。そばにいて自分をのぞきこんでいた母親に、攻撃の照準を合わせたのでず。「オカアサンハ モウノ」あの危機的場面で発したこの一言。これはもう、筆者にとって心がゾクゾク騒ぐ、ユカイな一言です。直観的に、そうなのです。ネ、あなたもそうでしょう、と気安く肩をたたきたくなるほどユカイなのです。困っちゃいますね、なぜそうなのかを説明しなければならぬなんて、モウ。お前の「語録」に忠実であろうとする限り、お前にはその義務がある。そうですか。確かにそうですね。でも、それにしても気が進まないナア。

それでは、こんなことを考えてみましょう。もしかりに娘

の視野に「センセイ」の姿しかなかったら、彼女はどうかだろうかと。これはまったく仮空の場面にかかわりませんので、正誤の判定は困難です。しかし筆者自身は確信にも似た感じで次のように言いけることができます。彼女はフフンと少々オーバーに身をよじるとしても、またもう少々うらめしそうな眼差しをセンセイに向けるしても、それ以上のオーバー・ビヘビア（あらわな行動）はみせなかったであろう。と。「センセイハ モウノ」の一言は、絶対に出なかったであろう、と。

それでは解答になっていない。義務を履行する気なら、なぜそのように思うのか説明せよ。ハイハイ、あなたはもう立派に筆者の「仲間」になってくださったようです。結論（めいたもの）を引き出したから、それで終り、ではいけない。どのようなプロセスを経たのか、たどった過程をだいにしたい。まさにそのとおりですネ。

3 子どもと大人は違う、のだが

ではここで、腹をすえて、できる限り自分に忠実に述べてみようと思います。後で辻つまを合わそうとした部分が少なくありませんので、多少ズルイ解答になりそうですが、悪し

からず。鳴門の渦潮のようにという表現の当否はともかくとして筆者の心の中には絶えずいくつかの渦が巻いています。大きさを換え、速さを換え、位置を換え、あるときは二つが一つに合体し、またあるときは逆に一つが二つに分割され、絶えることなく渦巻いています。

それらの渦のうち、近ごろ、大きくはなったのだが回転が遅くなって、筆者をヤキモキさせているのが、(第四回でも触れた)発達にかかわる教育作用の位置づけの問題です。教育ないし保育という営みが子どもたちの発達を促す、と把握することに誤りはないと思います。しかし、教育ないし保育という名のもとになされている働きかけのすべてが、現実とそのとおり機能しているかどうか、これは吟味を要する事柄に属します。無条件にイエスの回答はできそうにありません。ここまでは大方の皆さんの賛同が得られそうです。

問題は次です。それならば、どうすればよいのでしょうか。これまで五回にわたってあれこれ述べてきたことの根っこも、すべてこの点に連なります。今回はこれを、子どもは大人と違う存在だ、とする「常識」を疑い直そう、というかたちに表現してみたいのです。今世紀は子どももの世紀、というスローガンのもとに、ようやく「正当に」評価されるよう

になったこの「良識」を、疑い直すとは何事か、とまたまたお叱りをうけそうです。しかし、本当に違うのでしょうか。と言うよりも、何のために、違うと把握する必要が生じてくるのでしょうか。

たとえば、幼児は自己中心的存在だ、とするらえ方は幼児教育界のすみずみにまで行き渡ってしまったようです。このことばを用い始めたのはピアジェ (Piaget, J.) だと思われていますが、その際、彼にはこの用語を採用せずにはいられない強い問題意識があったはず。かれこれ五十年も昔のことです。ひるがえって、今日のわたしたちはどうでしょうか。このレッテルを子どもにはりつけ、それによって自己満足を得ているに過ぎない。こう評したら過言あるいは的はずれでしょうか。

子どもがパパは「オジサン」でないと言い張ると、なるほど幼児は自己中心的だ、したり顔。オモチャを独占しようとする、幼児って自己中心的だからネ、と解説、無茶苦茶なけんかでも始めようものなら、ウンこれこそが真の子どもの姿、などとこ満悦。これでは、自己満足と決めつけられてもグウの音も出ますまい。要するに子どもは(自分のあずかり知らぬところでレッテルをはられただけで)放っておかれる

のです。その後には可能なはずの（よりハッキリ言えば、その後につづくべき）一連の働きかけ合いが、大人の側から一方的に断ち切られてしまうわけです。

さらに悪いことに、このレットテルはやたらにベタベタはられがち。中には明らかに誤ったはられ方も少なくない。自己中心性という用語は、筆者の理解するところ、一つの事物・事象が二つ以上の視座からみられ得ることに気づいていない心性、とりわけ、自分と他人との関係理解の不十分さのゆえに生じるそのような心性を表現するためのもの。したがって、利己的傾向とはまったく異なるはず。自他の利害関係を十分のみこんだ上で自分の利益をはかるのは、これはまったくの別物。それなのに現実には、という次第に相なるのです。

4 子どもを見る大人の目

もっと悪いのは、ハイわかりました、とばかり勉強したての誤りない（？）知識で、またはレットテルはりに専念されるご仁の出現です。こんなかたに限って、幼児は純真そのものの、利己的な心などあろうはずがない、とかたく決めこんでしまわれがち。何のことはない、メガネを替えただけで依然として色メガネで子どもを見、そして、それに合致しない部

分、を切り捨ててしまわれる。落ちつく先は同じ、自己満足。こうなっては正直なところ、お手上げです。

以上のところから、当面二つの事柄が注意事項として上ってくるはずですが、まず一つは、自分が用いることばについてはその意味する内容をできる限り吟味しておくべきこと。これは原典に忠実であるためにという以上に、その用語を互いに口にする仲間どうしが正確なコミュニケーションを確立するために必要だ、と言うべきでしょう。同じ用語に別々の意味をこめて使っていたのでは、話がこじれてしまうばかりです。原典に立ち戻るのは、互いに精確な概念規定を共有するための手段だ、と言い切ったら便宜主義に過ぎるでしょう。

もう一点は、先ほどの点が満たされた上で、その用語の使い方は十分慎重になさるべきこと、です。これにはいくつかのポイントが含まれます。誰の目にも明らかなのは、それを色メガネとして使わないこと、でしょう。色メガネを通して見ると、この多様な世界がなんとも単純化されてしまいます。最もひどい場合には、子どものなす事すべてが自己中心的にうつります。これは、色メガネの主が自分もハッキリ意識できぬままそれ以外の部分を切り捨てている結果にほかな

りません。

この落とし穴を注意深く避けられたとしても、次の危険が待ちかまえています。「それ以外の部分」が実はいろいろ違うのに、自己中心的でない、として一括されてしまう傾向が、それです。この傾向はとて強く、これから抜け切ることはかなり困難。わたしたちはついつい、この子はまだ自己中心性が目だつけど、あの子はもうそろそろ「卒業」が近いなどと、この危険のトリコになってしまっているのです。

そこで次に、この危険をも打ち砕く手段を編み出す努力が必要となります。どうすればよいのでしょうか。結論から言えば、レッテルはりをやめること。それに代えて、子どもたちとどうかかわるのかを再検討すること、に尽きると思います。レッテルはりがたかだか子どもの現状追認にとどまることは、すでに明らか。むしろ、この子どもたちが今後どのように伸びていくのかどのように伸ばしてやろうとするのか、未来へのつながり、広がり、深まりを、視野の中にキチンととらえようとする努力が欠かせません。

それではここで、2で述べた事例に立ち帰りましょう。娘が発した「オカアサンハ モウノ」の一言。それは八つ当たりで過ぎない、として片づけてよいでしょうか。手もとの辞

典によると八つ当たりとは「その事に関係の無いものにもでだれかれの区別なく当たり散らすこと」そうだとすれば、ちょっと違うようです。視野の中にもし看護婦の姿があったとして、「カンゴフサンハ モウノ」は聞かれたでしょうか。

筆者の答えは、どうしても「ノー」です。娘は自分を取りまく人とひとりひとりと、その時点までに形成されていた自分とのかかわりを読みとり、その場の状況をも察知した上で、自分のふるまい方を決定したと思われる。他者とのかわりの中で自分自身を知り、つくっていく、とする説を認めるなら、この幼い行動とわたしたち大人の行動との間にどのような違いを見いだせばよいのでしょうか。幼児自身にとつての「自分」というテーマも、未解決部分が少なくないようです。

5 おわりに

さて、このへソ曲がりの小論、はじめ数回という予定でスタートしたのですが、今回が第六回。もう「引退」すべき潮どきです。

ふり返ってみると、少しばかりの苦しきをはるかに上まわる楽しい仕事でした。日ごろボンヤリ見過ごしているあれこ

れの点をやや丁寧に拾い上げ、みつめ直し、新たな立ち向かい方を模索する。今回の作業を通じて、ボンヤリ見過ごしてきた度合いが「ボンヤリ」感じていた以上にヒドイものだった、と実感できました。それだけにこの仕事、チャレンジングであると同時に、十二分にエキサイティングだったので。

なんのことはない、お前自身の無知に気づき、それをあらわにするだけではないか。こんなことは先刻承知、すでに必要な手もうってある。これこそまさにお前自身の自己満足に過ぎないよ。こんな声が聞こえてきそうです。ハイごもっとも、と申し上げたい。「謙虚さ」が心の一方にあります。しかしました、イヤそんなはずはない、という「不遜な」気持ちの心の片すみに残るのも隠し切れません。

この辺の事情を考えると、公共性を増すことがお互いにとって必要と思われてきます。それで、今回のシリーズを閉じるに際して、一つの提案をしておきます。もし許されるなら、次の機会には「キャッチボール方式」を採用してみたらいかがでしょう。どなたか「好敵手」とともに登場して、ひと月おきに交替で筆をとる。Aの提案に、Bはコメントを加え、新たな問題点を指摘し、それを受けてAは考察を深め、

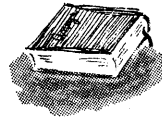
Bにバトンタッチする、というスタイルです。

この方法の採用によって期待される利点の第一は、「逃げ」が少なくなること。一人だけだと、どうしても困難を回避してしまいがち。この悪癖が多少なりとも改善されそう。第二点は、この協力作業によって「書いてない部分」を読みとることが促進される、と予想できる点。自分の中でモヤモヤと存在はしているのだが正体不明の部分が、しだいにハッキリしてくるだろう。そして第三に、その問題の解決方法についてもより多くの道が開けてこよう。それは決して二人分の「加算」ではなく、「乗法的」に働きあうはず、等々。つまるところ、共有できる特有性をわたしたち相互の間に確保し、増していこう、ということです。

さてもさても長い間、辛棒つよくおつき合いました。ありがとうございました。

(三重大学)

始まり



山本秀子

今の私は、「アーアー」と五回、カラスのような泣き声で生まれてきた四ヵ月になる子どもと、うんちをみつめつつの、書物からは縁遠い、バカになる一方の生活を送っている。それはまた、昨日と今日は決して同じであってはくれない、常に保身的であることを許してはくれない生活でもある。前の私ならとても耐えきれないだろう。でも今は楽しい。

何といっても天(神)が授けてくれたものの素晴らしさに驚き、感謝する毎日である。たとえば生後一ヵ月半ごろ、目がみえ、耳がきこえ始めると、それまでの、こちらの思うことを伝える手段が抱く以外になかったのが一変して、落着いた晴やかな生活になったことである。そして目下は、指手が動きはじめ、両手をからみあわせたり、親指だけが口にはいるようになりつつ

ある。私が自分の手を使い痛め、手を使うまいと思うが何をするにも手がいることを痛みとともに知ることあわせ考えると、「手が使える、手が手の役目をする」ことの素晴らしさに、ただただ驚き、そう生まれることのできたこの子は幸せ者と思うのである。

子どもの生活リズムが、まだまだ大人のとかけ離れていたころ、おむつ替え—お乳—あやす—おむつ替え—あやして寝かせる、の繰返しを何度しただろうか。真夜中でもおかまいなしの生活だし、どれ一つのバランスが崩れても寝てくれず、またはじめからやり直してあった。徹底して自分の要求を泣いて訴えるし、それを満たさねば泣きやんでくれない。途中で放ったりごまかしたりが許されない。どうしてよいかわからず、子どもと一緒に泣い

たこともある。そんな夜を何度も繰返すうちに、一つずつ積んできた積木をパッとこわされても、また一つからやり直す大らかな気持ちと、やり直す時に前とはどこか違った工夫がいることに気付いた。気を長く持ちつつも行動は子どもをよく見つ、手際よく、子どものリズムにのり遅れないことである。泣いていても大泣きに至る直前に抱き上げるとか、口の動き一つからも語る何かを見るのである。赤ちゃんは泣くも笑うも人の力を借りなくてはできない。(ふと考えると形こそちがえ、大人も人の中で泣いたり笑ったりしているのだが)それがとても負担に思え、イライラしたこともある。しかし月日が解決するというか、子ども自身、育つところがちゃんとあることに気付かされる。そんな時、育児書など

のわくにとらわれると、余計イラだちもするが、自然に流されて、それでも今はいいんだといってくれる人がいることと、春を信じて低空飛行していうという気持ちでのりこえていける。そして過ぎてみるとあるリズムをふんでいることに気付くことがしばしばである。一日中、そして一生のつきあいだから楽しくいきたい、そのことを一番に考えると、いろいろなわくがとれてくる。

そして生活全体も、ものごとの原点(はじまり)にたちもどって考えられるようになる。

「外」を意識した生活のペールをはぎとられることもしばしばである。大人の都合ばかりで先に突走ることを、泣いて呼び、許してくれぬ子ども。そんな時、改めて本当に先にすべきこと

なのかをふりかえらせ、あせつてしなくても反省させられる。本当に先にすべきことをごまかしていたことを知らされる。

「子どもは一冊の本である」の詩を思いおこし、うんち(基本的なこと)をみつめる生活も、子どもの発達に目をみはる生活も、私にもものごとの原点(はじまり)を考え直させ、新しいフィールドでの私の保育の始まりである。

(元 お茶の水幼稚園)

始 ま り

早 川 満 寿 子

保育に携わる者にとってこの一年の流れはどこで始まりどこで終わるのか。四月が始まりで三月が終りと、そんなこと、当り前なことではないかといわれそうだ。四月で始まった一学期は、七月に来る夏休みが一区切りともいえる。冬休み春休みも、また同じようである。その間に、始まりと終りが繰返される。いや一ヵ月が一区切でその中に一週間があり、もっと身近にこの一日の始まりと終りがある。この一日の短かい時間の中でも、同じような始まりが幾重にも繰返されるのではないか。

子どもたちの動きの中では、初めての発見や経験が折り重なって成長を組

み立てている。子どもにとって出会いとか、発見とか、創造によって得るものは、その瞬間からすべて始まるし、次の経験と重なり合って、終りを知らない。だからこそ、大胆に活動し表現できるのであろう。いつも誰かがやっている「泥んこ遊び」を例にとって見ても、遊び始めたら最後で、終りを知らない。きれいに丸められたおだんごを、順序よく並べて悦に入っている子どもに、いたずらっ子が近づいて、そのおだんごを力一杯踏みつぶしてしまう。一瞬の中に心こめて作ったおだんごは崩れて消えてしまう。子ども同志のいい争いがしばく続くけれど、その崩されたことが動機となって、もっと

固い、もっと素晴らしいおだんご作りへと、終りを知らない活動が始まるのである。またこわされた動機は、全く新しい活動新しい発見へと子どもを動かす。友だち同志の初めての遊びも生まれて、楽しい遊びの始まりにもなるのだ。大人はなぜか始まりとか終りとか、区切りしめくり等を、ことさらつけたがる。一日、一週間、また一か月の、その始まりがずっと後までの影響を及ぼし、すべてを決定してしまうかのように思ってしまう。

子どもが生きている現実の中では、いや人間が生活して行くと言うことの中には、「始め」は「終り」の中にすでに、ずっと前から胎動しているのかもしれない。「始め」は「終り」であり、「終り」は「始め」なのである。

(相模原市 翠ヶ丘幼稚園)

はじめてのこと

大橋 利恵子

たちはさぞめいわくであったらうと、今になってにやにやしてしまいます。

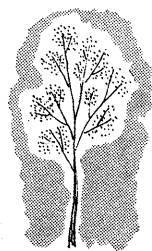
先日、名古屋の公立幼稚園で楽しい経験をしました。昨年生まれ育った東京を離れ、大垣にとつた私は、十月ぶりに名古屋で臨時就職したのです。が、東京で二年間保育の経験があると、いっても何もわからない状態です。まして新しい土地で、初めての子どもたちです。たった一日の代理先生でしたが、少々固くなっていたようです。お天気がよいので庭に出て遊ぶことにし、数人の女の子と「花いちもんめ」を始めました。最初のころは歌詞が思い出せなかったのか、ほとんど私がリードし、一人で歌っていました。東京でやっていた時と同じ様に「鬼がこわくていかれない」と調子よく足を出し

ながら、ところがしばらくして、子どもたちも調子をあげてくると、どうも歌が違うのです。「鬼がこわくていかれない」という所が、「鬼がこわくてよういかん」なのです。考えてみれば、名古屋の子どもたちが土地の言葉で「よういかん」と歌うのはごくあたりまえのことなのですが、初めて聞いた私はびっくり、すぐに順応して「よういかん」にすればよいものを、なぜかかたくなに一人、「いかれない」と歌い続けておりました。あとでその園の先生方とこの話をし、大笑いしてしまいました。先生方もやはり「よういかん」でなくては調子が出ないそうで、「、かれない」とやられた子ども

すべてが「初めて」の今の私は、毎日がこんなことの連続です。何事にも「初めて」の時の気持ちは不安と期待のいりまざった何とも複雑なものです。慣れてしまつてから思えば、なぜあんなことを……と思うこともあれば、また、最初はあんなだったのに……と感慨深い思いをすることもあります。とるにたらない小さなことにせよ、初めての時の感情は新鮮であり、大切ではないでしょうか。今私は、小さな小さなことひとつひとつにおどろきながら、この土地の子どもたちの世界に入りこみたいと切に願っております。

(元 東京都文京区立汐見幼稚園)

旅・発達 (四)



津 守 真

二十年前に、私が米国の大学で学んでいたころ、児童発達の講義の中で、教授より、動物生態学者、ティンバーゲンの名前を聞いた。彼は、動物の行動を研究するのに、実験場面や、つくられた環境の中では、その動物の固有の行動があらわれにくいと考え、自然の生活の中で観察することの重要性を強調したのである。児童心理学の分野でも、実験や調査が盛んになりつつある時期であったが、子どもの自然な生活の中での研究が必要であることがそこで論ぜられた。そのときにきいたもうひとつの研究は、ロージャー・バーカーの行動生態学のことであった。彼は、ひとりの子どもが、朝起きてから、夜ねるまでの生活の中の行動を、詳細に観察し記録して、それを丹念に分析した。もちろん、数人の記録者が交代で記録し、米国の研究のことであるから、信

頼度や妥当性の吟味も手落ちがないように仕組まれている。こういう方法で、彼は、乳児、幼児、児童、いろいろの年齢で、いろいろの日常生活場面について研究している。この二つの研究は、生きた生活そのものの中に動いているものをとり上げようとしている研究として、私には新鮮に感じられた。その後、日本に帰り、お茶の水女子大学の付属幼稚園で、あのいきいきと遊び、毎日、思いがけないことが展開していく保育に、しげしげとふれていて、ティンバーゲンとバーカーのことがいつも頭から離れなかった。子どもらしい、生きた生活を生み出す保育はどこにでもあるものではなく、子どもの生活をそこまでもつていくのはたいへんなことである。そのような生活を、学問の面でどうとらえたらよいかということが、それから長い間、私の研究課題であった。

今回のモントリオールの旅から帰ってすぐに、サイエンスという米国で発行されている雑誌の最新号の中に、ティンバーゲンが、一九七三年にノーベル医学賞をもらったときの受賞記念講演がのっているのが目にとまった。その中で彼は、行動をありのままに見て、これは何だろうと不思議に思うという昔ながらの方法が、いかに重要かということをくりかえし述べている。それこそ、彼がこれまで魚や鳥の生態の研究に用いてきた方法である。

(ティンバーゲンは、これは自分が作り出した方法論ではなく、古くから人々がしてきたことを自分が新たに見直しただけのことだとただし書きをつけている)そして、このような方法論が、現代の緊張から生じる病気の治療と関係があるのだと述べて、二つのことを取り上げる。その第一は、幼児の自閉症についてである。幼児の自閉症といわれる症状は、最近の西欧化された社会で増加しつつあること、その診断、原因、治療法などさまざまな意見があり、そのいずれも満足のいくものでないことを、文献に沿ってのべてから、自分たちがどのようにしてこの問題に興味をもつに至ったかをのべている。(私も、動物生態学者、それも魚や鳥を専門としてきたティンバーゲンが、どうして自閉症の子どものことに関心をもつようになったのか、興味深く思った)

一九七〇年に、ジョン・ハット夫妻の書いたものの中に、他人

と目をあわせないこと以外は、自閉症の子どもの社会的場面で示す行動はすべて、普通の子どもにも見られるものであるという一節を読んだとき、ティンバーゲン夫妻は「はっとしてすわりなおした。なぜなら、私どもは長年、普通の子どもを見ていて、カナ1のいう自閉症の症状の要素は、すべて普通の子どもに認められるものであることを知っていたからである」

こうして彼らは、普通の乳児の観察にとりかかる。幼い子どもをもった家庭を訪問したり、訪問されたりするとき、大人はまず子どもを親しく見るが、次には子どもを無視して、大人同志の会話に移る。そうしながら、目のすみで子どもの行動を見ることができるし、それに合わせて振舞うことができる。ある子どもは、その見知らぬ人をじっと見つめて、注意深く研究する。こうなれば、ときどき子どもの目を見ても安全である。そのとき、もしも子どもが目をそらすなら、目による接触は直ちにやめた方がよい。こういう子どもは、大人のひざに手をおいたりなど、触觉による接触によって近づこうとする。こういう時がだいじな瞬間である。このような子どもに、大人は、見ることによって反応してはならないのであり、注意深く子どもの手にふれていく方がよいのである。そうして、もし必要なら立ちどまり、子どもの反応に応じて、一歩退き、しだいに、触觉によるふれ合いによって、子

どもを安心させていくことができる。こうして、一緒に笑ったり、声をかけたり、物を渡したりなど、微妙な交流の後に、目を合わせるができるようになる。この過程を通して、子どもの微妙な表情までも理解して、それに合わせておとなが振舞うようになるのである。この普通の子どもについての観察を心にとめて、自閉症児にも、同じように、その微妙な心の動きに合わせて近づいていくと、多くの表情があらわれ、大人との交流ができていく。ティンバーゲンは、そのようなセラピーの事例経験を述べて、多くの自閉症児は、環境的な緊張によって生ずるものであるという。

「こういうわけで、自発的に人、物にふれていくことができるようにすることによって、不安をとり除くことを目的とするようなセラピーの方が、特定の技能を教えることを目的とするセラピーよりもずっと成功するのである。不幸なことに、すでに述べたように、印刷された報告からは、実際にどのようなセラピーがなされたかを判断することが困難である。たとえば、あるスピーチセラピストは、子どもの中にふみこんで、子どもを訓練されたサルのようにみなし、他の症状はすべて顧みない。あるいは、かえって悪くしてしまうのである。……」

こういう自閉症の子どもが西欧化した社会に増加しつつあるよ

うに見えるということは、自閉症に準ずる子どもは、もつとたくさんいることを示すものであろう。実際、現代の都市生活には、個人生活にも、社会生活にも緊張が多く、親も教師も、自分自身の不安の中に閉じこめられて、子どもが目の前にも、その微妙な心の動きを見ることができず、それに合わせて振舞うような心のゆとりがない。そこには、子どもへの行動をありのままに見て、これは何だろうと不思議に思う興味も出てこないであろう。

ティンバーゲンは次に、アレクザンダーという俳優が、声が出なくなつたときに、自分の体の姿勢と心の状態とが関係があることに気づいて、そのことを仔細に観察することから編み出したセラピーのことを述べる。それは五十年前も以前のことで、医学界からは無視されつづけてきたのであるが、それは現代的な観察法であり、その業績は注目すべきものであるとして、おもしろい事実がいろいろ述べられるのであるが、ここでは省略しよう。最後に、ティンバーゲンは、幼児自閉症とアレクザンダーの治療法という二つの特殊な事例に共通なことは何かという問を發し、まず第一に、心を開いた観察——ありのままに見て、これは何だろうと不思議に思うことの重要さを知らせてくれることにあるという。この基本的な方法は、大がかりな近代的な器具や、検査や、薬品などに目を奪われて、見下されることがしばしばである。し

かし、動物の生態の研究における、この素朴な観察が医学においても役に立つものであることを強調して終わっている。

ティンバーゲンの「生態学と緊張病」という講演を紹介して、大分長くなってしまった。最初に述べたように、私は、この人を、魚や鳥の研究者として知っていたのであるが、その人が、子どものことにふれて研究しているのを見て大へんに驚いた。そして、その乳児の観察など、さすがに微妙なところにふれた観察をしており、感嘆した。(ここでは、なまの記録の詳細を記すことはできなかつたが)そして、私自身、研究者として幼児の行動を見るときに、このようなあたりまえの観察ができていくかどうか反省させられた。また、このような素朴な観察は、保育者にとっても共通に必要なものである。そこから出発して、これは何だろうと不思議に思うと、子どもの行動は、ひとつひとつ、実に興味深いものであり、次々に多くのことが考えられてくる。二十年前に、ティンバーゲンの研究方法にはじめてふれたときの新鮮な感動が、新たに心よみがえって、身近なところにある、この素朴な観察を、これからもたいせつにしていこうと思った。

外国の風土や人にふれるたびに思うことであるが、人間のまごころや、喜び、悲しみには共通のものがあるが、社会生活の中で

の考え方や物の見方には、日本人とは違ったところがいろいろある。長い間の歴史や風土の中で、人の心の深いところに作られているものがあるのだろう。夏の旅から帰ってからしばらくして、私は、大阪の丸山先生から、最近、赴任された土地の子どもには、市の中央の地域の子どもとは違った落着きがあるから、一度来てみないかというお誘いをうけた。私はさっそく出かけみることにした。

小学校の古い校舎をそのまま使っている幼稚園は、幅が二尺ほどもある床板を用いてあり、床板の継ぎ目から、床下の地面が薄明るく見えるところがある。子どもたちは、お化けが出るといって、そこからのぞくのだそうである。園庭のすぐ下は河原で、その向いの山が正面に見える。裏山はみかんの畠で、昨年は豊作だったので、父兄がリヤカーでみかんを運んでくれるほどだったとのこと。松阪駅からバスで三十分ほどの射和（やまと）というところである。そのバスは一時間に一本で、交通に不便なところである。近くを通る街道は、昔は、紀州の殿様が参勤交代で江戸に行かれるときに通られたそうであり、昔は交通の要所だったとのことである。この射和の商人が、紀州家にお金を用立てていたというから、昔は勢力をもった町であったと思われる。

私が訪れた日の午後、丸山先生に案内されて、その街道からさ

らにはずれて三十キロほど西にある丹生^トの水銀鉱に行くことになった。あたりには人家もない低い山の奥に、真黒な穴が口をあけている。石を投げると底の方でどぼんという音がかえってくる。

いまは廃坑になっているが、和銅年間から掘りつづけられた日本でも最古の水銀坑とのである。奈良の東大寺の大仏を鑄造したときにここから水銀を運んだのだそうだから、ずい分古い話である。私は、はじめは、何でこれが射和の幼稚園と関係があるのかわからなかったが、しだいに明らかになってきたことがいろいろあった。ここで掘られた水銀は射和で加工され、化粧に使うお白粉などになり、松阪の商人の手によって、京、大阪や江戸にまで売りさばかれた。射和は、このような古い時代から、松阪商人の背後にあつて繁栄した町であつた。この小さな町には、昔ながらの家が多く、おじいさんの、そのまたおじいさんの、子どもにとつてはいつのころからかわからぬほどの過去からそこに住んでいる人々が多いらしい。幼稚園の子どもたちは、おじいさんやお父さんがそこで生まれてそこに住んでいるように、自分もまた、そこで大人になっていくであろう未来を疑うことができないような環境である。子どもたちの心に落着きがあつても不思議はない。

古いということは、落着きがあるということだけではない。長

い間消えることのない人間同志のさまざまなことがあるだろう。伊豫寺という射和の町の和尚さんから、この町の歴史をいろいろと話をきく機会が得られて興味深かつた。そのむかし、奈良朝の時代に、僧行基がここに来て、人々が極悪非道であるのを見て、丹生でとれる水銀鉱をここで処理することを教えたという。

(丹生の神宮寺には、その鉱石を砕いて入れた木のくりぬぎの壺と、それを火にかけたやきものの碗が保存されている。奈良時代のものといわれ、箱にはサンスクリットの古文字の表書きがあり、判読できない。それをも見る機会が得られたのは貴重な体験であつた)その後、時代は下つて応仁の乱のとき、京都より逃げ落ちてきた武士が、この寺のある場所二つの大川にはさまれた中州⁺に居を構え、追手をおそれて名もTとかえてそこに住みついた。そこに麻園をつくり、織物を織る技術を教え、江戸方面にまで販路をひろげた。それが、この町の近世の繁栄の基礎となつたという。T家は四方白壁の八ッ棟造りの門構えの豪壮な家だつたという。その八ッ棟の門は、もとはといえは、外敵を防ぐとりでの役を果たすものだったということである。T家の菩提寺として建てられたこの寺には、本居宣長や賀茂真淵の書や、江戸時代の有名な画家の画いたものが、ところ狭いほどにある。そこにすわっていると、江戸時代に住んでいるのではないかと思うほどであ

る。いずれもT家の寄進によるものであるという。

その中に、とくに和尚さんが説明して話されたふすま絵がある。虎の河渡りの図で、四枚のふすまに画かれた大きなものである。母虎が子どもの虎を背にのせて激流の河を渡っている。この虎には三匹の子どもがいて、その中の一匹は乱暴な性質で、きょうだいの虎と岸に残しておいたら何が起ころかわからない、そこで母虎は、まずこの子どもを背にのせて向う岸において、引返して二番目の虎を運び、その虎を背にしてもにもどり、その子を置いて三番目の虎を向う岸に運び、またもどってこのやんちゃ者の虎を背にのせて激流を渡ったとのことである。もしかすると私の説明に間違ったところがあるかもしれないが、要するに、この母虎は、乱暴な子どもをとくに心配し、困難や危険をおかしても、どの子どもにもよくなるように気を配ったというのである。これは人間の保育者の最高の心づかいであり、本能をもってそれをなしている虎を画いた画家の目は、子どもをの保育を心得た眼であると思った。このお寺のご息女が幼稚園の先生であることをつうかがい、教員養成学校で教えられるずっと以前から、日本の文化の中で培っているもの大きさを思わせられた。

翌朝、私は射和幼稚園を訪れた。松阪市内から市営バスに乗って行くと、あちこちの停留場から、子どもたちが何人かずつ乗っ

てくる。間もなくバスの中は幼稚園の子どもたちでいっぱいになる。まるで専用のスクールバスのようなのである。バスの中で、シールを見せ合っている子どもたちもいる。幼稚園の前でバスがとまると、先生方がバスの扉のところまで出迎えておられる。子どもたちの後についておりた私も、見知った先生方の顔を見てほっとする。

次々に子どもたちが集まってくる保育室にいく。子どもたちの私に対する最初の反応は、いつも幼稚園を訪問するときの私の大きな興味のひとつである。部屋に入っていくと、すでに来ている子どもたちが、つつ立ったまま私の顔をボケッと見る。だれも一言も発しない。しばらくの間、じっと見て立っている。少しずつ私との会話が始まるのは、それからずっとあとである。はじめての訪問者に対する反応は、幼稚園によっていろいろである。「おじさん、どこからきたの？」と声をかけてくれるところもある。

「いいのみせてあげようか」と、私にだじなものを見せてくれる子どもがいるところもある。子どもから親しく声をかけられると、こちらも気持ちがあなごみ、子どもたちの中にはいりやすくなる。感情のこもらない調子で、「お早うございます」と形だけのようないさつをされると、お客さまになっっていなければいけないような気がして、よそよそしく感じられる。子どもたちがよ

く遊んでいるところに訪れると、私など眼中にないかのようである。米国の幼稚園でも、日本の幼稚園でも、そのいずれもがあつておもしろい。

射和の子どもたちは、そのいずれとも違う。じつと見つめて立っているだけである。私にとつてはこういうところはめずらしい。私は、そのゆっくりとしたテンポの中に引きこまれて、そのまま、そこに腰をおろすよりほかなかった。それからしだいに気付いたのであるが、子どもたちは、あまり動きまわらないで、ひとつのことをじっくりとやる。それぞれが好きなおめんにあつて特色のあるものを作っているが、長時間、ゆっくりと、そのことをやっている。

丸山先生の話によると、松阪市内では、アパートの狭い部屋で暮している子どもたちは、幼稚園になると、まず幼稚園中を駆けめぐることが、ここにはそういう子どもはいないのだそうである。射和の子どもたちは、どこの家も古くからの家であり、子どもたちは、自分の家の中と、家のまわりだけで、十分に遊ぶことができる。そして前にも記したように、子どもをとりまく大人たちは、ずっと昔からここに住み、ここで生まれて、ここで育った人々である。子どもたちもやはりここにずっと住むことに疑いをもつて

いないであろう。(それが、実際に許されるかどうかは、わからないことであるが) こういう点は、東京の子どもたちはまるで違ふし、米国の子どもたちはもつと違う。米国の子どもたちは、大きくならないから同じ町に住むと思つている者はほとんどないであろう。実際大人になつてから、あちらこちらに散らばつていく状況は日本以上である。また、米国の子どもたちは、親か祖父母か、外国から移住してきた者も数多く、二、三代さかのぼれば、その先祖は、世界中に散らばるだろう。

射和の子どもたちは、帰るときも市営バスである。ちょうど、中学と高校の定期試験の時期で、真黒な制服の集団の満員バスの中に、幼児たちがつめこまれていく、私は心配になつて、先生にたずねたが、中学生も高校生も、みんな、どの幼児はこの家の子で、どこで降りると知つているから、親切にしてくれるし、おり損なう心配もないのだそうである。

この落着いた古い町にも時代の波は押し寄せつつある。何年前に、行政指導によつて、裏山の林を伐採して、みかん畑の造成を奨励したのだそうである。そのみかんは、昨年は作りすぎて、出荷するだけ損になるので、川原に捨てている。みかん畑は放たらかして雑草が生え、父親たちは、工場に出かせぎにいく。山の木を伐つてみかんの造成をしたため、昨年七月には鉄砲水が出

て、幼稚園の床まで水についた。こんなことは、昔から長い間なかったことだそうである。そして、園児の父母が給出で、泥運びをし、清掃してくれたとのことである。幼稚園のことを自分のこのように思つて世話をするというようなことは、都市では見られないことである。

こういう中で、幼稚園の先生たちは、子どもたちを川原につれて行き、みかん山につれて行き、小さいときに、自然の環境に十分に親しむように一生懸命になっておられる。火をたく煙やにおいがいいといつて餅つきをしたり、室内では、こまをまわし、木工をしている。木工をするときには、子どもたちは、幼稚園の備え付けの子ども用の金づちよりも、うちの金づちの方がよく打てる、といつて、うちから持つてくる。どこを打つのはKくんのがいいといつて子どもの間で、金づちの種類や特性をよく知っている。庭に出ると、おとし穴をつくるといつて、子どもたちはスロップで穴を掘る。おとし穴を掘るくらいおもしろい遊びはないが、いまの子どもたちのどれだけがそのよろこびを知っているだろうか。子どものためにある幼稚園ですら、庭をシャベルで掘ることを許されるところは少ないのが現状であろう。おとし穴を掘れる射和の子どもたちは幸いであると思つた。

古い文化をもち、自然に恵まれた土地に住む幼児と幼稚園にふ

れて、私も心が落ち着き、心の中がひろくなったように思えた。そして、こういうところに米国の幼児教育のプログラムをもってきたとしたら、どうなるだろうかど考えたりした。それは、あの国の文化や風土の中で、素直に前進的に協力し合える人々の生み出したものである。その土地での問題を解決するために、——異質の文化の背景をもった人々が、同じ言語を用い、互いに理解し合つていくというような、そういうことのために、——考え出した方法である。その積極的な協力の仕方は、実に気持ちのよいものである。しかし、異なった文化や風土の中に、目に見えた成果だけをもつてきても、その精神は失われて、手近なことに利用するだけに終わることになりかねない。

これからの日本人が、世界の人々とまじわつて、人間としての共通な大きな心をもつて生きていくことができるように育つということは、日本の教育の大きな課題であると私は思う。いつ、どこで、どのようにして、ということとは、人間の生涯の発達という大きな流れの中で見ていかねばならないことである。いろいろな能力も、外国語も必要である。それぞれに適切な時がある。幼児期にたいせつなものは何であろうか。前にもふれた、私の描画の研究でも指摘したように、二歳の子どもでも、自分が探し求めて

いる世界があつて、周囲の大人の理解や助力の中で、子どもは自分の世界の中に、自分で中心を見出していく。二歳の子どもの中にも、大人にも共通な、そして子どもらしい豊富な世界がある。

これは一例であるが、幼児期に子どもは、人生の真実の基本を学んでいくといつてよいと思う。それはおそらく世界中の子どもにも共通のことである。それには、子どもの生活が自分自身のものとなつていくだけのゆとりがあること、自然にふれることができること、他人のまごころにふれることができることは欠くことのできない重要なことであると思う。夏の旅を終えて、あらためて考えさせられたことである。

訂正 五月号60ページ

赤ちゃんのおみそや―教育の中における障害児差別について―は、「教育の中……」の誤りですので訂正いたします。

編集部



沖縄
みやとり幼稚園風景
(25ページ参照)

泥ねんど遊び

久保田芳子著

こどもとリズム

——リズム教育の理論と実際——



山村 きよ

久保田さんは、邦正美先生の一弟子といわれ、現在では幼児と共に「う

ごきのリズム」「創作舞踊」の研究者として活躍しておられる先生。私との関係は、かつて文部省から出された幼稚園音楽リズム指導書を作った時の仲間です。今回出版されたご本を手にして、最初にかき出された文章の中に非常に興味をもって読み終わりましたので、是非とも「現在の幼稚園や保育園

の先生方に」読んでいただきたいものとご紹介します。

「破壊のすすめ」という文章から始まって、「リズム」ということばのもつ意味、「リトミックとリズム教育の関係」「こどもとリズム」「創造とリズム」「舞踊とこども」など、理論をしっかりとした根底において、一般的には耳に聞かない「うごきのリズム」の実際指導場面を段階的に、実に上手に指導の

「手ほどき」をされています。

とかく、何かと一方的に片よりやしい幼稚園、保育所の先生方は今こそ反省していただきたいもの、わらべ歌もリズム遊びも自由表現も、すべては、こどもの生きた姿の中でこそ生まれ出るもの、先生によって引き出されるもの……こうしたことがみんな、この本を読んでいるうちに納得されるのではないでしょうか？

昔のようにあやつり人形ではないにしても、まだまだ「仕込まれているおゆうぎ」の指導場面は消えない現在、幼児教育界に大きな石をなげてくださいました感じの「この本」を多くの先生方におすすめていたします。

(聖徳学園短期大学)
れんが書房発行 定価八〇〇円

子ども側からのカリキュラム

—教育の中における障害児差別について—

福井達雨



☆ 四羽のにわとり

今年の雪は、すごかった。

毎日毎日、ボタボタと雪が降り、風もともなって吹雪になる。

見ているまに、四十センチ、五十センチと積もっていく。

昼間は、その雪がとけて、あちらこちらでズシン、ズシンと、

屋根から雪の落ちる音。大きな老樹の枝が、雪の重みで、ミリミ

リ、バシンと折れて落ちてくる。

朝になると、昼間の雪どけのしずくが、こおりついて、屋根か

ら大きな氷柱がぶらさがる。男の職員たちは、夜になるとその氷

柱や雪をとってきて、ウイスキーやお酒の中に入れ、悦に入って

チビチビやっている。

こんな大雪の朝、私は、止揚学園のにわとり小屋に行ってみ

た。にわとり小屋といっても、四羽のにわとりがいるだけで、S

君という重い知恵おくれの男の子が、その世話をしている。

にわとり小屋では、相変らずS君が、セッセと雪をのけたり、

エサをやったりしていた。

「どうや、よく卵をうみよるか」

「ウン」

「毎日、何個ぐらいうみよるんや」

「四つ、五つ」

「ヘー、よくうみよるなあ。君が一生懸命世話するからなあ」

S君は、頭をかきながら、「へへ」とうれしそうに笑った。

つと、にわとりの水のみを見ると、ゆげがあがっている。オヤ

と思つて、その水に指をさし入れたら、熱いお湯であった。

「S君、にわとりに、熱いお湯なんかやったらあかんがな」

私が言うと、S君は、不思議そうな顔をした。

S君に言わせると、毎日、大雪が降って寒いので、冷たい水を

のませたらかわいそうだから、熱いお湯をやったらしい。

S君の舌足らずな言葉の説明を聞きながら、私は、何かホノボ

ノとするものを感じていた。

S君は、真夏に、にわとりがのどを乾かしているからと、カルピスをやったこともあった。

ある時、S君が、二週間ほどにわたりの世話をしなかった。不思議なことに、その二週間、にわとりがほとんど卵をうまず、S君が、また世話を始めると、卵をうみだしたということもあった。

こんな時、S君のにわとりへの愛情を強く感じるとともに、一生懸命に人間が生きているという意味を教えられる思いであった。

現代の人間は、どんなところでもアクセクと必死に生き、"自分分は、一生懸命に生きている"と考えている。しかし、一生懸命に生きて、愛がない場合もある。真実に一生懸命に生きるということは、その対象とするものに、愛をもち、その愛が豊かに生きる生き方であろう。

私は、S君から、そのことを教えられ、すばらしいなあ、深い喜びをもったのである。

☆ 月の中のおうさぎ

先日、悲しい出来事があった。

テレビを見ていたら、小学校低学年児と幼児五人が、ある大学の先生と対談をしているのがうつっていた。

大学の先生がたずねた。

「月の中は、どうなっているか知っていますか」

何人かの子もが、元氣よく手をあげた。そのうちの一人が、意氣揚々と答えた。

「あのね、月の中にはね、うさぎさんがいてね、おもちをついているんだよ」

大学の先生は、手を大きくふって、

「それはまちがいだよ。月の中はね、大きな岩石がゴロゴロして、ところどころに大きな穴があいていて、うさぎなんか住めないんだよ。そんなまちがったお話は、信じないようにしましょうね」

周囲にいた子どもたちが、「お月さんの中に、うさぎなんていないよ」と、軽べつしたように、ゲラゲラと笑った。

それから三十分間、元氣よく答をした男の子は、一度も上をむかず、話もしなかった。私は、その子どもを見つめ、心が痛んでしかたがなかった。

どうして、子どものおもい、心を生かしてやらないんだろう。

どんな時でも、機械的、科学的にものを教える社会は、その中で、幼い子どもの心を傷つけ、殺すことが多い。子どもの単純な素直な発想にふれ、そこから教えられ、深い喜びを感じるのが、教育者であろう。

「そうだね。お月さんの中には、うさぎがいて、おもちをついているんだよ。そのおもちは、とつてもおいしいよ。そしてね、うさぎさんがおもちをついている地面は、大きな岩や、穴があいていてね。……」

私だつたら、このように語つたであろう。その大学の先生は、科学者であつて、教育者でなかつたのである。何か、教育者として、恐しさを強く感じたひとときであつた。

☆ カリキュラム不在の教育

さて、障害児を、幼稚園、保育園に入園させるべきだと、私たちが言えば、多くの人が、賛成してくださるが、その人たちから、

「この子どもたちを入園させることは、よいことだと思ひますが、私たちには障害児教育の方法論や技術がわからず、どうして教えてよいのか困つてしまいます。」

これでは、入つてきた子どもが、かわいそうです」

よくこのような質問をうける。こんな時、私は、

「イヤ、いれてくださるだけでよいのです。教育というと、

先生たちは、教えることばかりお考えになる。だから、わからなくなつてしまう。障害児が、クラスに入ると、初めは、障害をもたない子どもが、オズオズながら近づいていくでしょう。子ども

は子どもどうし、短時間に一緒に遊ぶようになり、共に手を取りあうようになります。そこから、人間の心が、子どもの心が育っていくでしょう。

現代の教育は、先生の側からカリキュラムが作られ、そのカリキュラムで、形式的に、上から子どもにもむかつて、どんどん教えていく。一度ここから脱皮した、カリキュラム不在の教育が、幼児教育にも必要だと思ひます。

子どもたちのもつているものにふれ、それに教えられ、その中で先生が思考し、子どもとぶつかる中で、汗や涙を流す教育も必要だと思ひます」

乱暴だが、こう答えているのである。

子どもとのふれあいの中で、教育が生まれ、喜びが生まれる。

止揚学園の職員たちを見ていると、

「子どもが、お便所でウンコやオシッコをした」「たたかれたら、たたきかえした」「遊びまわつてガラスをわつた」「リズムの時に、三十秒立つていた」「名前を呼んだら、じつとこちらを見つていた」

このような、日常茶飯事のちよつとした変化にも、大きな喜びを示し、それを自分の喜びとしている。

ここから、教育が生まれる。カリキュラムも、先生側から作る

のではなく子ども側から作りだされていく。

このような世界が生まれれば、「障害児を入園させたいが、どう教えてよいのかわかりません」という質問は、なくなるだろう。

☆ 学校は貧乏やなあ

先日、ある小学校の先生たちに講演をした。

その時、一番問題になったのは、「障害児学級の子どもたちは、毎日遊んでいる。あれでは、学校に来る意義がない」ということであった。

この先生たちは、カリキュラムを作り、算数や国語、音楽や絵画を教え、もっと効果的な教育をしなければ、子どもが不幸だといっているのである。

私は、障害児学級の先生にたずねた。

「どのような教育をされているのですか」

「カリキュラム通りには、授業はしていません。子どもの心が不安定だと、算数をやめ、自動車に乗せて、公園や、動物園や、レストランに行くこともあります。

また、ある日、校長先生が、一人で運動場の草ぬきをしておられました。それをみつけた障害児学級の子どもたちが、「一人で草ぬきをさせるのはかわいそうや。校長先生はおじいさんやか

ら、ぼくたちも助けに行こう」と言いだし、国語の時間だったけれども、それをやめて、草ぬきをしました。

この時、子どもたちが、「学校が貧乏やから、草ぬきの人がたのめんのやなあ。だから、校長先生が草ぬいてるんやろう」と言い、校長先生が、その返事に困っていたことを思い出します。

それから校長先生は、障害児学級の子どもたちを本当に大切にしてくださいようになりました」

障害児学級の先生は、こんな話をされた。

私は、すばらしい教育が、そこにあることを感じた。

しかし、他の先生たちは、これは教育ではない。教育とは、カリキュラムを通して、先生が子どもを教えることだと言われる。

このような機械的、科学的、プログラムの教育技術論がはばをきかせている現在、その障害児学級のあり方に、非難がうまれるのは当然であろう。そして、この教育論から、障害児は、教育の効果がないと、しめ出されてしまう。しかし、非難をする前に、教育の本質とは何かを、もう一度みなおしていただきたいものである。

教育とは、子どもの中にあるものを生かし、育て、創りだすものである。子どもの心を無視した教育は、なんと恐ろしい教育であろう。

(止揚学園)

日本幼稚園協会 共催 米国幼児教育事情視察旅行について
みどり会

日程 期間 Aコース〈9日間〉 昭和50年7月27日(日)～8月4日(月)

コーディネーター みどり会 会長 山村きよ

Bコース〈9日間〉 昭和50年7月28日(月)～8月5日(火)

コーディネーター お茶の水女子大学附属幼稚園長 勝部真長

参加費用 Aコース 295,000 (先着30名募集)

幼児教育関係の方向きに企画した、セミナーコースです。

Bコース 286,000 (先着30名募集)

幼児教育関係のお方はもちろん、お母さまお子さまにも楽しんでいただけるコースです。

※費用は全日程の航空運賃、専用バス運賃、一流ホテル(ツイン)料金、3食、視察経費通訳費を含みます。

視察予定先 スタンフォード大学付属ビッグ・ナースリー・スクール

カリフォルニア大学付属パークレイ児童研究センター

カリフォルニア大学幼児開発センター (ロスアンゼルス)

マーチンルーザーキング児童センター ディズニースランド、米国家庭訪問等

申込み締切日 昭和50年6月30日

詳細パンフレットもしくは問い合わせは、下記へご請求ください。

日本交通公社 海外旅行新宿支店

〒160 東京都新宿区西新宿1-18-8 03-346-0181 (直通)

幼児教育事情視察旅行係 担当・白井, 富田, 国松

◎企画発表以来、多数のご賛同、お申込みをいただき一層深く感謝いたしております。

幼児の教育 第七十四巻 第六号

六月号 ◎ 定価二〇〇円

昭和五十年五月二十五日印刷

昭和五十年六月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二

印刷所 図書印刷株式会社

110 東京都千代田区神田小川町三ノ一

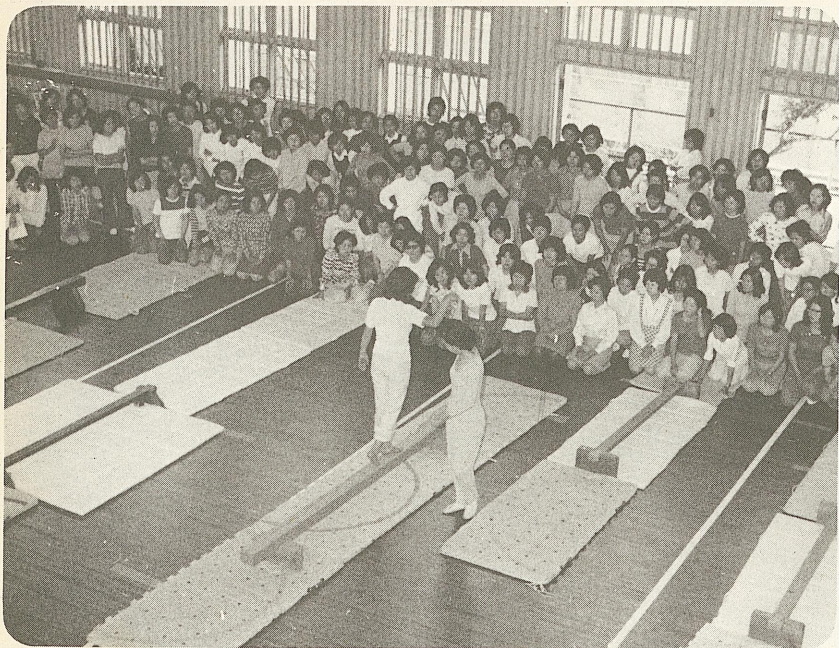
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
フレーベル館にお願いいたします

昭和50年度 フレーベル館

現代幼児教育研究会開催について



フレーベル館現代幼児教育研究会は、去る昭和40年に発足以来、幼児教育に携わる全国の先生方に親しまれながら発展してまいりました。昨年度は10年目を迎えるに当たり、全国の諸先生方のご意見、ご要望を十分に検討させていただき、実施致しましたところ、多大のご好評を賜り、有難くお礼申し上げます。

今年度は、昨年度に引続き、地区研究会を、全国各地において年間15ヶ所で開催する計画を立て、全国大会は休会と致します。また、内容的には、より実践的なものを主体として、実施致すよう計画致しております。

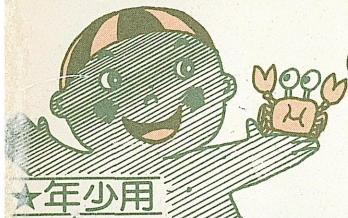
今後、実施時期に応じて、各地区毎に、担当店よりご案内状をお届け致しますので、先生方の一層のご指導、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

フレーベル館現代幼児教育研究会事務局

〒101 東京都千代田区神田小川町3の1 TEL(03)292-7781(代)

なつのおとそだち

今年もより充実して、



楽しさもゲンと
増えました。

★年少用



これこそ本当の3歳児用だ
とご好評をいただいた49年
度版に引きつづいて、こと
しもかわいいウサギの子を
主人公に、1日の生活を絵
本風にまとめました。

A4判 16ページ 170円

●付録：年少用はB4判の大型
の生活表となりました。楽し
い絵柄と、晴、曇、雨の3種
類のシールがつけました。

付録：「なつのせいかつ」（生活表）－①年中用・②年長用
一週間ごとに約束事項を変えたり、簡単な日記にもなるよう一ページ、
一週間にしてあります。また旅行の際にも活用できるよう楽しい工作
ページをいっしょに冊子にしてあります。 〈B5判 16ページ〉

●付録：「きぬいとそうのたね」（種の実物）－①、②のみ
家の中で手軽に、確実に発芽する絹糸草の種をつけました。



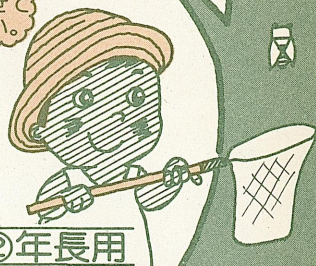
年齢に合わせて
ご利用下さい。

①年中用



かわいいフマの子と仲間た
ちとの生活をとおして、子
どもたちが楽しみながら、
いろいろなことを考え、学
びとれるように配慮してあ
ります。

A4判 20ページ 170円



②年長用



夏休み中のおしつけ的な宿
題にならないよう留意して
編集してありますが、内容
は豊富です。きっと子ども
たちの自立心や探究心を満
足させることでしょう。

A4判 20ページ 170円